

# 鯨 研 通 信



第397号

1998年3月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町4番18号 東京水産ビル 電話 03 (3536) 6521 (代表)

## ◇ 目次 ◇

JARPA往復航海における南半球中低緯度鯨類目視調査の概要	松岡耕二	1
ミンククジラの鯨体部位の名称	錢谷亮子	13
日本鯨類研究所関連トピックス (1997年12月～1998年2月)		25
日本鯨類研究所関連出版物等 (1997年12月～1998年2月)		25
京きな魚 (編集後記)		27
ストランディングレコード (1997年11月～1998年3月受付)		28

## JARPA 往復航海における南半球 中低緯度鯨類目視調査の概要

松 岡 耕 二 (日本鯨類研究所)

### 1. はじめに

当研究所が日本国政府の特別許可を受けて実施しているJARPA(南半球産ミンククジラ捕獲調査)では、南半球産ミンククジラの繁殖海域及び南下経路における分布及び系群判別に必要な情報を収集するために、日本から南極海までの往復航海を利用した南半球中低緯度鯨類目視調査(以下本調査と称する)を実施している。

殆どのヒゲクジラ類は、冬季には暖かい低緯度海域で繁殖活動(交尾、出産、哺育)を、夏季には餌生物が豊富な高緯度海域で索餌活動を行っている。異なる水域で繁殖及び索餌活動を行うために季節的な南北回遊を行い、高緯度海域ではいくつかの繁殖集団が混在するために、繁殖集団毎の回遊生態や系統群判別の解明には、高緯度海域の調査だけではなく、回遊途中の中低緯度海域の調査が非常に重要となる。

本調査はまた、調査海域における鯨類の分布を把握することを目的にあげている。南極海への往復航海を利用しているために、調査の実施時期及び海域については制限を受けるが、鯨類の繁殖海域の推定や回遊ルート解明のための貴重なデータを提供している。

本報では、1989/90～1996/97年度に実施された本調査の概要とともに、特に南半球産ミンククジラの繁殖域から索餌海域の季節における分布状況及びその回遊に関する知見について紹介する。

### 2. 中低緯度鯨類目視調査の概要

#### 2.1 調査海域と背景

調査海域は、南緯25～60度、東経70度～180度で囲まれた広大な海域であり、海域内には南極大陸を同心円状にとりまく亜熱帯収束線

(Subtropical Convergence)と南極収束線(Antarctic Convergence)がおおよそ南緯40度付近と南緯50~60度付近に存在している。

本調査における対象海域は、1950年代から日本の捕鯨船団(探鯨船)によって目視調査や海洋学的調査が行われ、海洋環境と鯨類の分布については、『鯨研通信』264号(町田, 1973)及び269号(町田, 1974)にその成果の一部が報告されている。また、1976年からは捕鯨操業とは独立した水産庁による鯨類資源調査事業(目視調査及び標識調査)が開始され、南半球低緯度から高緯度に至る広大な海域において全鯨種を対象とした組織的な調査が1987/88年度まで実施された。この結果、1965/66年度からの探鯨船データを含めた調査資料に基づき周年にわたる鯨類の分布が報告された(Miyashita *et al.*, 1995)。

現在では、本調査の他に1978/79年度から実施されているIDCR(国際鯨類資源調査10ヶ年計画)とそれを引き継ぐSOWER(南大洋鯨類生態調査)が当該海域での目視調査を実施している。IDCR並びにSOWERの調査資料は調査船を提供

している水産庁に帰属し、遠洋水産研究所が保管管理している。

## 2.2. 調査船と調査コース

本調査では、1989/90年度より調査船、第1京丸、第25利丸及び第18利丸の3隻が、1995/96年度からは目視観察場所を装備した第2共新丸が加わり、4隻の調査船で調査にあたっている。

これらの調査船は一定間隔に設定された3または4本の調査コース上で独立した目視調査を行っている(図1)。通常日本から第IV区(東経70~130度)へは、インドネシアのロンボック海峡を經由してオーストラリア西側を南下するコースをとり、第V区(東経130度~西経170度)へはオセアニア州カロリン諸島近海を経てオーストラリア東側を南下するコースをとる。復路調査もほぼ往路と同様に一定の調査コース上を北上し南緯20~30度付近まで調査を実施している。調査コースは各年度の調査日程、南極海での調査開始点及び終了点を考慮した直線のコースとなるが、暴風圏通過のため止むを得ず変針する

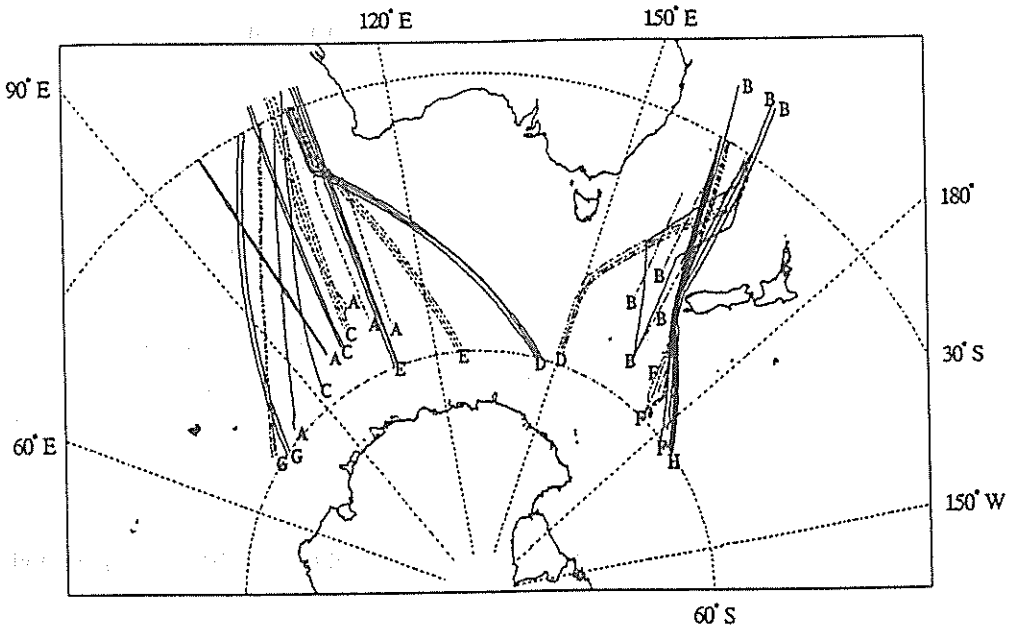


図1. 本調査における年度別調査コース。A~Hは調査年度を示す。実線は往路調査、破線は復路調査を示す。A:1989/90, B:1990/91, C:1991/92, D:1992/93, E:1993/94, F:1994/95, G:1995/96, H:1996/97。

場合など一部曲線コースになることもある。実際の調査日数は、年度によって多少異なるが往路復路それぞれ概ね7～8日間である(表1)。

### 2.3 調査方法と接近対象鯨

調査船はトップマスト及びアッパーブリッジと呼ばれる観察場所を持っており、トップマストには3名の目視観察者が、アッパーブリッジには船長、砲手、操舵手及び調査員が目視調査に従事した。調査員は全ての発見鯨に対する目視記録を記入し、当直航海士が努力量、天候記録を記入した。ただし、復航時は調査員が母船へ転船することから、船長が調査員を代行する体制で調査を実施した。

目視調査は、調査コースから両側3マイル以内で発見した鯨群のうちミンクジラ(ドワーフミンクジラを含む)の可能性のある群に対して接近する限定接近方式を採用し、接近後、鯨種と頭数を確認した。それ以外の発見群については接近せず、発見群が船の正横を通過するまでの間に得られた目視情報により鯨種及び頭数等を記録した。さらに1996/97年度からは、上記に加えシロナガスクジラ、コセミクジラの可能性がある発見についても新たに接近の対象とし、調査日程に支障のない範囲という条件付きではあるが自然標識撮影及び皮膚バイオプシーの採集調査項目を追加した。

## 3. 調査結果

### 3.1 探索距離

表1に年度別の総探索距離(哩)を示した。目視調査は天候に大きく左右されることから、探索距離は年毎に大きなばらつきが見られる。1992/93年度の往路の探索距離は2,839哩と長い。これはオーストラリア西側から南極海第V区へと対角線に横切る調査コースを設定したことや天候に恵まれたことに起因する。南半球初夏に行われる往路調査(11月下旬)と晩秋の復路調査(3月下旬)の探索距離を比較すると、前者の方が長かった。これは調査海域における初夏と晩秋の天候状況の違いを如実に表した結果と言える。

図2には緯度別の総探索距離を示した。往路、復路ともに南緯30度台が最も多く調査されており、南緯40～60度付近は暴風圏のために調査が限定されていた。また、天候条件の良い南緯20度台で探索距離が少ない理由として、赤道補給会合地点の関係上、近年は南緯30度を調査開始

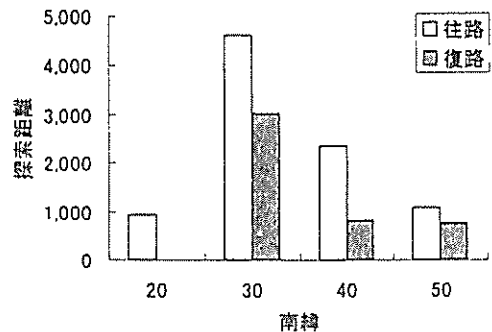


図2. 本調査における緯度10度毎の探索距離(哩)。

表1. JARPA中低緯度目視調査の概要

年度	往路調査		復路調査		調査海域の緯度帯	調査船
	期間	探索距離(哩)	期間	探索距離(哩)		
1989/90	11. 27-12. 5	1, 298	3. 12-3. 16	341	30° S-55° S	K01, T25, T18
1990/91	12. 09-12. 18	723	3. 22-3. 26	154	25° S-55° S	K01, T25, T18
1991/92	11. 28-12. 4	1, 216	3. 26-3. 31	586	28° S-55° S	K01, T25, T18
1992/93	11. 23-12. 2	2, 839	3. 26-4. 02	999	28° S-60° S	K01, T25, T18
1993/94	11. 26-12. 2	1, 358	3. 19-3. 26	653	20° S-60° S	K01, T25, T18
1994/95	11. 25-12. 2	734	3. 22-3. 29	538	30° S-60° S	K01, T25, T18
1995/96	11. 17-11. 25	866	3. 23-3. 29	1, 355	30° S-60° S	K01, T25, T18, KS2
1996/97	11. 22-11. 29	805	3. 14-3. 24	280	30° S-60° S	K01, T25, T18, KS2

K01: 第1京丸 T18: 第18利丸 T25: 第25利丸 KS2: 第2共新丸

としているため、実際には南緯20～30度での調査が行われていない事が上げられる。本調査の各緯度帯における探索距離の割合は、過去の同海域の探索距離(Miyashita *et al.*, 1995)とほぼ同様の傾向を示している。

### 3.2 発見鯨種

表2には、調査年度及び航海別発見鯨種の群・頭数を示した。調査を通じて確認した鯨種は、ヒゲクジラ類では8種類、ハクジラ類では12種類で、その内訳は以下の通りである。

表2. 本調査における年度別、鯨種別発見群頭数

往路調査 鯨種名	1989/90		1990/91		1991/92		1992/93		1993/94		1994/95		1995/96		1996/97		合計 群数	平均群 頭数	平均群 サイズ
	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭			
ミンククジラ (普通型)	5	6	3	3	4	6	6	21	1	1	4	5	5	7	0	0	28	49	1.8
ドワーフミンククジラ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.0
シロオガスクジラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	1.0
ナガスクジラ	2	3	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4	5	1.3
イワシクジラ	0	0	0	0	1	2	14	21	4	4	8	10	4	4	0	0	31	41	1.3
ニタリクジラ	0	0	3	4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	5	1.3
ザトウクジラ	1	1	0	0	2	4	11	12	1	1	0	0	0	0	0	0	15	18	1.2
セミクジラ	0	0	0	0	0	0	5	7	3	3	0	0	0	0	0	0	8	10	1.3
コセミクジラ	0	0	0	0	0	0	1	80	0	0	0	0	0	0	0	0	1	80	80.0
ミンククジラらしい	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1.0
種不明ヒゲクジラ類	3	4	1	2	2	2	14	16	2	2	1	2	2	1	1	26	31	1.2	
マッコウクジラ	7	113	10	40	1	1	32	49	8	21	6	12	1	1	8	24	73	261	3.6
ミナミトックリクジラ	2	5	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	5	9	1.8
アカボウクジラ	0	0	2	2	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.0
ミナミオウギハクジラ	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	9	2.3
オウギハクジラ 鯨類	0	0	0	0	2	5	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0	4	9	2.3
種不明カクジラ科鯨類	6	10	7	17	7	11	11	21	9	20	3	4	9	15	0	0	52	98	1.9
ヒレナガゴンドウ	0	0	0	0	0	0	3	51	0	0	2	21	1	7	1	35	7	114	16.3
オキゴンドウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20	1	1	0	0	2	21	10.5
種不明ゴンドウクジラ類	1	15	0	0	0	0	2	130	0	0	1	150	1	30	0	0	5	325	65.0
シャチ	0	0	0	0	0	0	1	20	0	0	0	0	0	0	1	15	2	35	17.5
スジイルカ	2	700	1	10	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	1	2	5	717	143.4
マイルカ	0	0	0	0	1	1000	2	52	0	0	2	350	0	0	0	0	5	1402	280.4
マダライルカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	50	0	0	0	0	1	50	50.0
ダンダラカマイルカ	5	24	0	0	2	10	3	12	0	0	0	0	0	0	0	0	10	46	4.6
シロハラセマイルカ	1	10	0	0	0	0	1	20	0	0	0	0	0	0	0	0	2	30	15.0
種不明カマイルカ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	192	0	0	0	3	192	64.0
種不明イルカ類	4	33	5	118	9	288	18	156	2	16	13	277	8	213	2	4	61	1105	18.1
鯨種未確認	2	2	0	0	0	0	35	105	3	3	4	4	4	4	3	3	51	121	2.4

復路調査 鯨種名	1989/90		1990/91		1991/92		1992/93		1993/94		1994/95		1995/96		1996/97		合計 群数	平均群 頭数	平均群 サイズ
	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭	群	頭			
ミンククジラ (普通型)	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	2	3	1	1	5	6	1.2
ミンククジラらしい	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	1	1	0	0	1	1	4	4	1.0
ドワーフミンククジラ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1.0
ナガスクジラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	3	0	0	4	4	1.0	
イワシクジラ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	2	1	1	0	0	3	4	1.3
種不明ヒゲクジラ類	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	0	0	4	5	1.3	
マッコウクジラ	3	1	0	0	0	0	16	56	5	31	5	22	3	7	2	3	34	122	3.6
ミナミトックリクジラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	1	0	0	2	3	1.5
種不明カクジラ科鯨類	1	2	1	5	4	7	6	13	6	10	2	4	8	26	0	0	28	67	2.4
ヒレナガゴンドウ	0	0	0	0	0	0	2	130	0	0	2	10	0	0	0	0	4	140	35.0
マゴンドウ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	120	0	0	0	0	0	0	1	120	120.0
種不明ゴンドウクジラ類	1	9	0	0	0	0	5	156	0	0	2	85	0	0	1	70	9	320	35.6
シャチ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20	20.0
マダライルカ	0	0	1	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20	20.0
スジイルカ	0	0	0	0	0	0	1	30	0	0	0	0	0	0	0	0	1	30	30.0
スジイルカらしい	0	0	0	0	0	0	1	50	0	0	0	0	0	0	0	0	1	50	50.0
ダンダラカマイルカ	1	21	0	0	0	0	0	0	0	0	1	15	1	2	0	0	3	38	12.7
シロハラセマイルカ	0	0	0	0	0	0	1	8	0	0	1	10	0	0	0	0	2	18	9.0
カマイルカ類	0	0	0	0	0	0	2	300	0	0	0	0	0	0	0	0	2	300	150.0
種不明イルカ類	1	50	0	0	0	0	4	163	0	0	10	316	3	17	0	0	18	546	30.3
鯨種未確認	1	1	0	0	1	1	2	4	1	1	1	1	2	2	0	0	8	10	1.3

#### ヒゲクジラ類

##### ミンククジラ

(ドワーフミンククジラを含む)

##### シロナガスクジラ

##### ナガスクジラ

##### イワシクジラ

##### ニタリクジラ

##### ザトウクジラ

##### セミクジラ

##### コセミクジラ

#### ハクジラ類

##### マッコウクジラ

##### ミナミトックリクジラ

##### アカボウクジラ

##### ミナミオウギハクジラ

##### ヒレナガゴンドウ

##### コビレゴンドウ (マゴンドウ)

##### オキゴンドウ

##### シャチ

##### スジイルカ

##### マイルカ

##### マダライルカ

##### ダンダラカマイルカ

##### シロハラセミイルカ

### 3.3 発見状況

本調査におけるミンククジラ、その他のヒゲクジラ類及びハクジラ類の発見分布を図3にまた、調査中の親仔発見情報については表3に示した。各々の発見状況は、次の通りである。

#### 1) ミンククジラ

往路調査では、普通型ミンククジラ28群49頭(親仔4例を含む)及び矮小型(ドワーフ)ミンククジラ1頭を確認した。これらの発見は南緯30~56度の範囲に一様に分布し、経度方向の分布についてみると、調査コースの影響も含めて、豪州大湾の中央部(東経130度付近)を境に、オーストラリア西側から豪州大湾西側に広く分布するものとタスマン海からニュージーランド南島南部沖合いに分布する2つの分布があるように見える。また親仔4例は、すべて南緯30度から40度の範囲でありオーストラリア西側3組及び

タスマン海1組で観察されている(図4)。ドワーフミンククジラは南緯48度42分、東経126度31分で確認した。

復路調査では、普通型ミンククジラ4群5頭及びドワーフミンククジラ1頭を確認したが、いずれの親仔も発見されなかった。これらの発見は南緯55度から60度の範囲で、発見数も少ないことから、往路調査で見られるような経度方向の分布傾向は認められなかった。また、ドワーフミンククジラの発見位置は南緯57度11分、東経150度37分であった。

ドワーフミンククジラは、わずか2例ではあるが、11月下旬に南極収束線の北側(表面水温9.7°C)で、3月下旬には南極収束線の南側(表面水温4.4°C)で確認した。南半球におけるドワーフミンククジラの分布範囲が、普通型ミンククジラと比べ南極収束線付近に限定されることを示す結果と考えられる。

#### 2) シロナガスクジラ

本種は、1995/96年度往路調査で1頭が確認されている。過去の日本の目視調査結果から、11月にシロナガスクジラが確認された海域として、東部インド洋海域(南緯30~40度、東経70~100度付近)、南西オーストラリア沿岸域及び、ニュージーランド沿岸域が挙げられている(Miyashita *et al.*, 1995)。

今回の発見位置は、南緯30度58分、東経102度20分で上述の東部インド洋海域の記録である。普通型シロナガスクジラとピグミー型の識別は行われていないが、推定体長が22mであったことから二つのタイプの成鯨であったと考えられる。これは、本調査の調査コースが1995/96年度の調査海域拡大(南極海第III区東海域、東経35~70度)に伴って、上述の東部インド洋海域を含むようになったことが、本種の発見につながったとも考えられ、今後の調査によってその実態が明らかになることが期待される。

#### 3) ナガスクジラ

本種は、往路調査では南緯40~45度、東経90~130度の範囲で4群5頭を確認し、その内の親仔1例を南緯43度17分、東経97度00分(表面水温11.8°C)で観察した。復路調査では、南緯45~

58度、東経70～100度の範囲で3群3頭及び南緯59度、東経174度で1頭の4群4頭を発見した。

本種の南半球における夏季の主要な分布域は、南極収束線南側の南緯50度～60度であることから、往路調査の発見は、南下中の群れを確認したことになる。往路及び復路における発見

は、親仔を除き全て単独であった。ナガスクジラは、索餌海域では複数頭で発見される例が多いことから、例数は少ないが、索餌及び繁殖海域への移動では単独で行動していることを示す結果といえる。また、本種親仔の発見位置は、ミンククジラやイワシクジラの親仔のそれと異

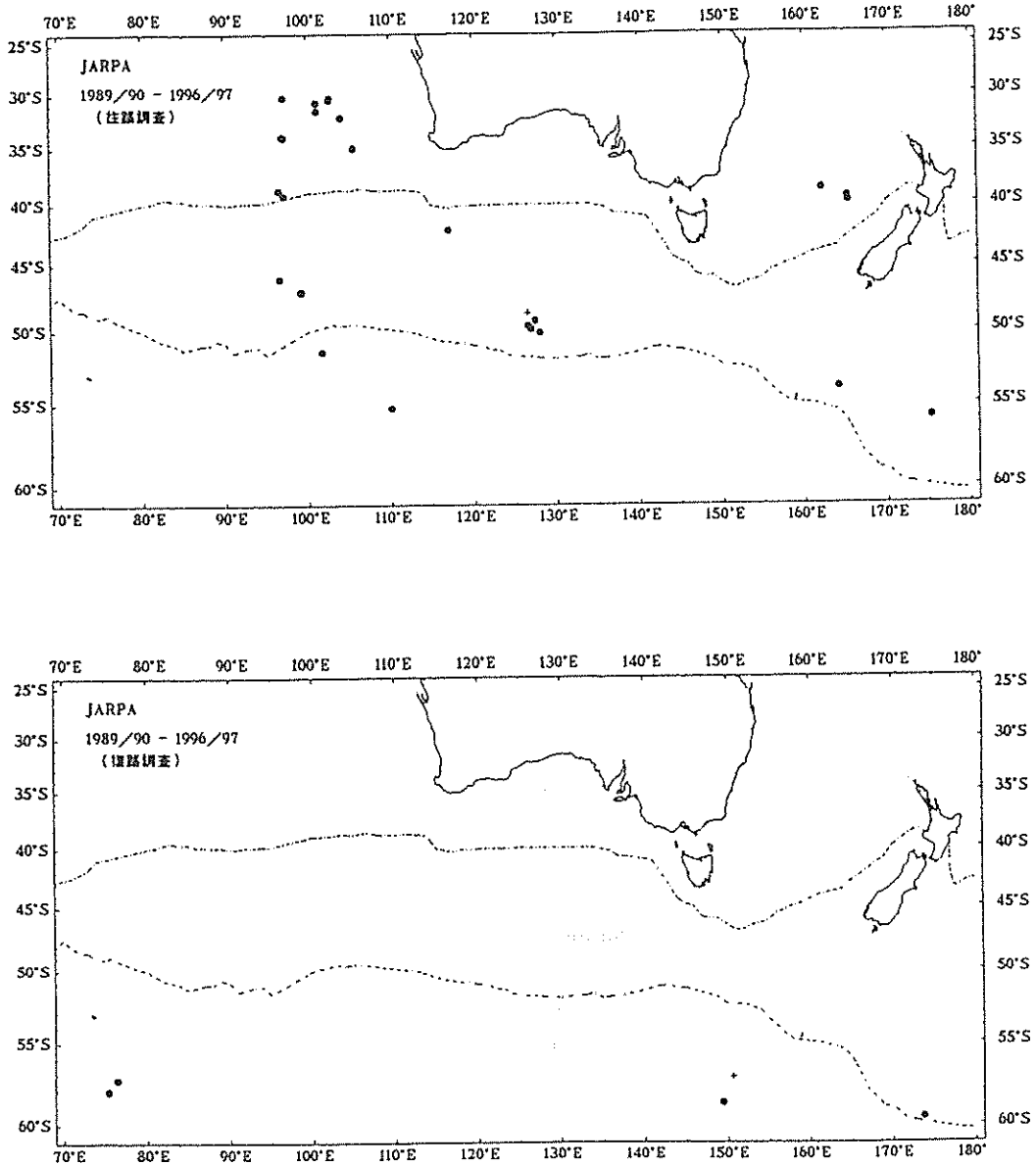


図3-1. 本調査における鯨種別発見位置 (ミンククジラ)。  
 ● : ミンククジラ    + : ドワーフミンククジラ  
 2点鎖線 : 亜熱帯収束線    1点鎖線 : 南極収束線

なり、亜熱帯収束線の南側に達している。本種とこれらの種では、南極海への移動時期が異なることを表していると考えられる。

4) イワシクジラ

本種は、往路調査で31群41頭が確認され、南緯28度から45度の範囲に広く分布した。本種は亜熱帯収束線付近を主要な分布域とし南極海の分布が他のナガスクジラ属鯨類と比べ少ないことが知られている。また、本種の親仔1例を南

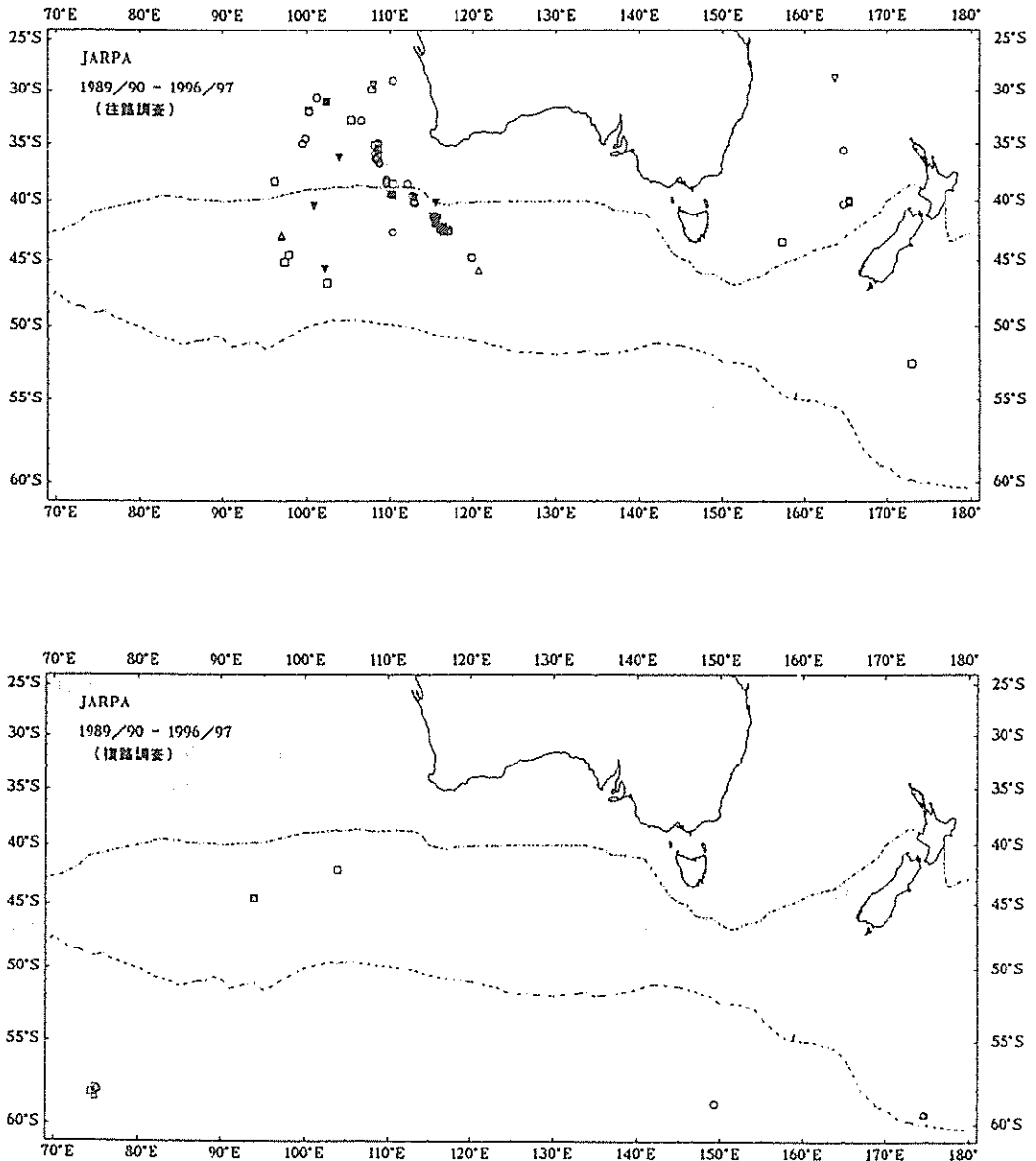


図3-2. 本調査における鯨種別発見位置 (その他のヒゲクジラ類)。

■ : シロナガスクジラ    △ : ナガスクジラ    ○ : イワシクジラ    ▽ : ニタリクジラ  
 ▼ : ザトウクジラ    \* : セミクジラ    ◆ : コセミクジラ    □ : 種不明ヒゲクジラ類  
 2点鎖線 : 亜熱帯収束線    1点鎖線 : 南極収束線

緯32度46分、東経106度37分(表面水温16.9°C)で観察した。これは本調査で得られているミンククジラ親仔の発見位置(南緯30~40度間、表面水温14~20°C)と重なっており、本種の繁殖海域が亜熱帯収束線の北側にあることを示す結果と考えられる。

復路調査では、本種を南緯55~60度付近(3群4頭)で確認しているが、南緯30~50度間では発見がない。これは努力量の不足も考慮しなければならないが、本種が南半球の夏季に南極収束線付近の水域に分布することを示す結果といえる。

#### 5) ニタリクジラ

ニタリクジラは、往路調査において4群5頭が確認され、これらの発見位置は南緯25~30度の範囲にあり、オーストラリア東側海域と西側海域(タスマン海)に分けられる傾向が見られた。発見例は少ないが、初夏に亜熱帯収束線北側海域のイワシクジラと混在することを示す結果となった。本種は復路調査では発見されていない。

#### 6) ザトウクジラ

本種は、往路調査の南緯35~45度、東経100~120度の範囲で15群18頭を確認した。また、親仔1例を南緯45度37分、東経102度08分(表面水温7.7°C)で観察した。復路調査では親仔は発見されていない。

本調査海域を通過するザトウクジラの繁殖海域として、西オーストラリア沿岸域、東オーストラリア沿岸域、ニュージーランド沿岸域があげられ(Dawbin, 1966)、また南極海では東経80~120度に集中して分布している(Matsuoka and Ohsumi, 1995)ことから、本調査における発見群は、調査時期及び発見位置から、西オーストラリア沿岸域からの南下移動群であると考えられる。また最も発見の多い水域(親仔を観察した水域を含む)が、ナガスクジラと同様に亜熱帯収束線付近であったことから、ミンククジラと異なる移動時期を示す結果となった。

#### 7) セミクジラ

本種は、1992/93年度および1993/94年度の往路調査において8群10頭が確認された。これら

の発見位置は南緯40~45度、東経110~120度の範囲に限られた。この水域は、亜熱帯収束線付近で、カイアシ類の集中分布域であり(河村, 1971)、本種の夏期における索餌域と考えられる。また復路調査では、本種は発見されていない。本種は、過去の調査における発見例からみて、南極収束線以南における発見が極めて希れであることと上述の発見例から見て、南半球における夏季の主要な分布域が、亜熱帯収束線付近であることがあげられ、晩秋には繁殖海域へ移動することが考えられる。

#### 8) コセミクジラ

本種は、1992/93年度往路調査において1群80頭が確認されている。発見位置は南緯41度37分、東経115度38分(表面水温11.6度)であり、亜熱帯収束線付近であった。

本種の洋上観察例は世界的にも極めて希であり、過去の漂着例や迷入例から、群れ構成は多くても数頭程度と考えられていたが、80頭の大きな群の発見は他に類例をみない。

本種が発見された水域は、セミクジラが多数確認されたカイアシ類の主要な分布域にあたるため、本種の索餌海域である可能性が考えられるが、実際の索餌行動は観察されなかった。

発見状況については、米誌の『MARINE MAMMAL SCIENCE』において報告されており(Matsuoka *et al.*, 1996)、本種の棲息海域、生体の体表カラーパターンや群構成を知る上で貴重な資料となった(図5)。

#### 9) マッコウクジラ

本種は、往路調査で65群237頭、復路調査で32群237頭が確認されている。これらの発見は、南緯25~45度の範囲に広く分布しており他の鯨種に比べ発見し易いことも考慮すると、南緯45度付近において分布の南限があるように思われる。本種は雌雄での分布が緯度的に大きく異なり、特に大型の雄だけが高緯度海域まで回遊することが知られている。インド洋における11月の本種の分布は、南極収束線が位置する南緯50~55度を境界として2つに分けられる(Kasuya and Wada, 1991)ことから、発見の大半が成熟メスと未成熟個体からなる家族群と考えられた。



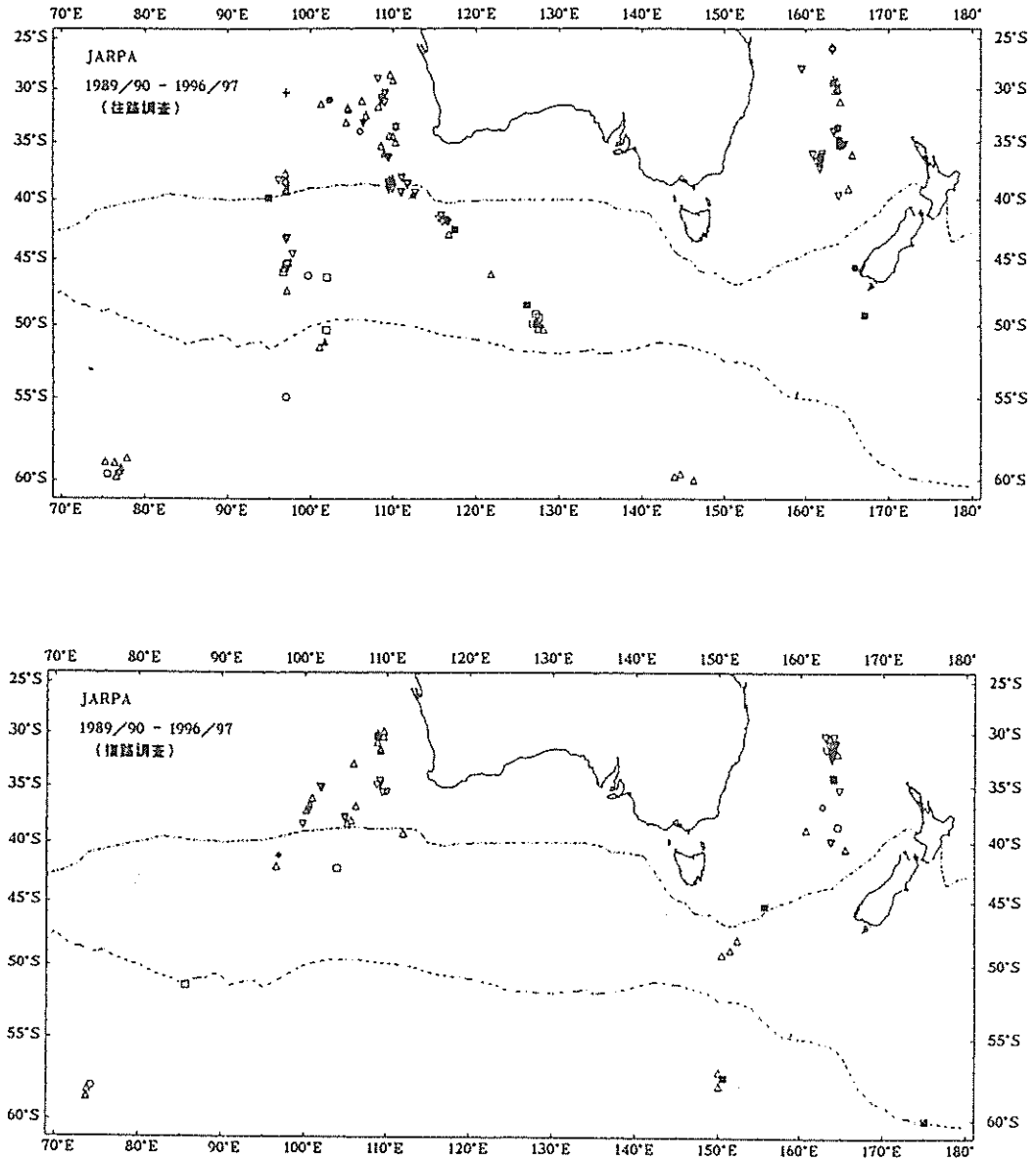


図3-3. 本調査における鯨種別発見位置 (ハクジラ類)。

- ▽: マッコウクジラ    ○: ミナミトックリクジラ
- △: 種不明アカボウクジラ科鯨類    ▲: 種不明オオギハクジラ科鯨類
- ◆: シャチ    □: ダンダラカマイルカ    \*: ミナミセマイルカ
- + : スジイルカ    ▼: マイルカ    ◇: マダライルカ
- : オキゴンドウ    ■: コビレゴンドウ    ▲: ヒレナガゴンドウ
- 2点鎖線: 亜熱帯収束線    1点鎖線: 南極収束線

表3. JARPA中低緯度目視調査における親子連れの発見について

日付	船名	目視 番号	緯度 (南緯)	経度 (東経)	鯨種	群 サイズ	仔鯨 数	推定 体長	表面 水温
89.11.29	T18	2	34.01	97.11	ミンククジラ	2	1	4.8	17.6
91.11.29	T18	3	32.11	104.06	ミンククジラ	2	1	4.5	16.9
94.11.27	T18	4	39.30	165.19	ミンククジラ	2	1	3.8	14.3
95.11.17	T25	4	30.28	102.41	ミンククジラ	3	1	3.0	19.8
89.12.01	T25	3	43.06	97.00	ナガスクジラ	2	1	—	11.8
91.11.29	T25	2	32.46	106.37	イワシクジラ	2	1	8.0	16.9
91.12.02	T18	1	45.37	102.08	ザトウクジラ	2	1	9.8	7.7
93.04.02	T18	7	30.59	164.14	マッコウクジラ	3	1	—	24.2
95.03.29	K01	2	30.18	162.56	マッコウクジラ	5	1	—	21.2
93.03.27	T18	3	57.29	150.37	ヒレナガゴンドウ	100	2	—	3.4
93.03.30	T18	1	45.21	155.39	ヒレナガゴンドウ	30	5	—	14.1
94.11.26	T18	9	35.07	164.43	マイルカ	300	50	1.2	18.0
92.11.28	T25	11	50.16	128.09	種不明アカボウクジラ科鯨類	2	1	1.8	9.0
90.12.10	K01	7	30.13	163.57	種不明イルカ類	50	15	0.8	22.4
92.11.28	T25	1	48.30	125.25	鯨種未確認	30	1	—	9.2

## 10) シャチ

本種は、1992/93年度の往路調査で1群20頭、1995/96年度復路で同じく1群20頭が確認されたのみで、南極海への移動及び中低緯度海域の分布傾向をみる事ができなかった。

## 11) アカボウクジラ科鯨類

アカボウクジラ科鯨類は、ツチクジラ属、タスマニアクチバシクジラ属、アカボウクジラ属、トックリクジラ属、オオギハクジラ属の5属に分類され、調査海域においてミナミツチクジラ、タスマニアクチバシクジラ、アカボウクジラ、ミナミトックリクジラ、ミナミオウギハクジラ、ヒモハクジラ、ニュージーランドオウギハクジラおよびアカボウモドキといった種類が分布することが考えられる。本科は、それぞれの形態がよく似ている上に潜水時間が長い為、洋上観察のみでは鯨種を判定する形態的特徴を得られない場合が多い。

本調査において科および属の形態的特徴が得られたものを整理した結果、往路調査ではミナミトックリクジラ5群9頭、アカボウクジラ3群4頭、ミナミオウギハクジラ1頭、オウギハクジラ属鯨類4群9頭及び種不明アカボウクジラ科鯨類52群98頭を、復路調査ではミナミトックリクジラ2群3頭、種不明アカボウクジラ科鯨類28群67頭を確認した。これらの発見位置は、

南緯25～60度までに調査海域に広く分布していた。

## 12) ゴンドウクジラ類

鯨種が特定できたゴンドウクジラ類についてみると、往路調査ではオキゴンドウ2群21頭及びヒレナガゴンドウ6群79頭であった。また、復路調査ではコビレゴンドウ1群120頭及びヒレナガゴンドウ4群140頭であった。これらの発見は南緯30～50度の範囲に一樣に分布する傾向がみられ、南緯50度以南では確認されていない。例数は少ないが、3種類のゴンドウクジラ類が、調査海域の中緯度において混在することを示す結果となった。

## 13) イルカ類

鯨種が判定できたイルカ類についてみると、往路調査ではマイルカ5群1,402頭、スジイルカ4群715頭、マダライルカ1群50頭、シロハラセミイルカ2群30頭及びダンダラカマイルカ10群46頭であった。復路調査ではスジイルカ1群30頭、シロハラセミイルカ2群18頭及びダンダラカマイルカ3群38頭であった。このうち、ダンダラカマイルカについては南緯45～50度付近(南極収束線付近)に発見される傾向が見られた。

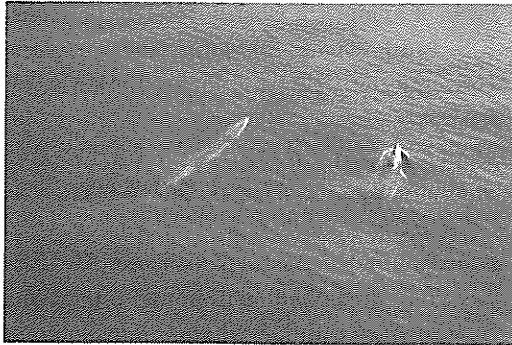


図4. 普通型ミンククジラの親仔。

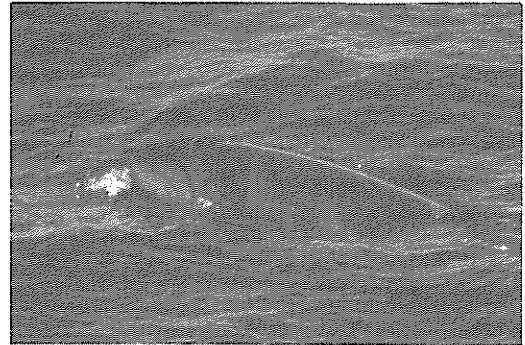


図5. コセミクジラ。

#### 4. これまでの調査で得られた知見

##### 4.1 普通型ミンククジラの分布

往路及び復路調査における普通型ミンククジラの発見時における表面水温の頻度分布を図6に示した。往路調査の発見は、表面水温4～13℃及び14～20℃の範囲の2つに分かれており、後者の水温帯では親仔が確認されている。また、復路調査の発見では1～9℃の範囲であった。

本調査海域では、亜熱帯収束線(水温10℃付近)が南緯40度線を中心に形成されタスマン海南方では南緯45度まで南下している。南極収束線(水温4℃)は、概ね亜熱帯収束線より緯度10～20度程南側に形成される。発見位置と表面水温から季節的な分布域を特定すると、往路調査の11～12月には、普通型ミンククジラは、亜熱帯収束線の北側及び南側から南極収束線に至る範囲に広く分布するが、多くの発見は10～18℃帯の亜熱帯収束線の北側で占められている。

また、普通型ミンククジラ親仔は、発見時の水温が14～20℃の範囲であり亜熱帯収束線の南側では発見されていない。

復路調査の3月では、南極収束線付近の北側に発見に限られ、往路調査の主要な分布域である亜熱帯収束線の北側では確認されていない。

##### 4.2 普通型ミンククジラの繁殖海域と南下経路について

ある鯨種の繁殖海域を特定するには、一般にその水域で出産や交尾といった一連の繁殖行動を直接観察することが必要であるが、本調査海

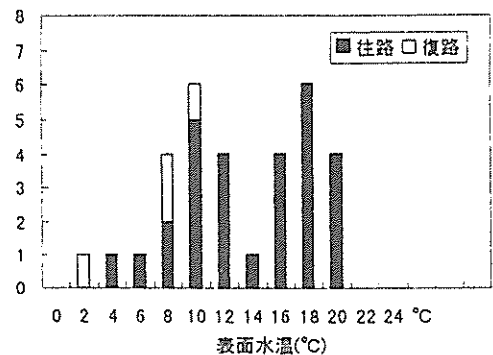


図6. 普通型ミンククジラ発見位置における表面水温。

域のような外洋域における繁殖行動の観察例は極めて希れである。しかしながら親仔の観察例、特に仔鯨の大きさから、その水域が繁殖海域であるかどうかをある程度例証することは可能である。

現在、普通型ミンククジラの繁殖海域として、インド洋東部(東経70～120度)、南太平洋西部(東経170度～西経130度)、南太平洋東部(西経120～90度)、インド洋西部(東経30～50度)の低緯度水域が推定されており(Kasamatsu *et al.*, 1995)、本調査における4例のミンククジラ親仔の発見位置は、このインド洋東部(東経70～120度)の南側に位置している。各々の仔鯨の推定体長及び親鯨との大きさの違いから、同水域内で出産および哺育が行われている可能性が高いことが伺える。

また普通型ミンククジラの南下回遊経路については、11月～12月における過去の日本の目視

調査結果から、上記各々の推定繁殖海域(南緯10~20度付近)からほぼ直線的な南下経路が想定されている(笠松, 1993)。往路調査で得られた普通型ミンククジラの発見位置は、推定繁殖海域と同様の経度を示す傾向にあり、緯度的には南緯30~55度までの範囲で広く分布する傾向を示している。このことは普通型ミンククジラの南下時期に大きな幅がある事示す結果と考えられる。復路調査では発見例が少なく、北上時期および経路については、現時点では不明である。

## 5. 終わりに

最近のJARPAやSOWERの成果によって夏期の南極海における各鯨種の資源量、系統群判別、餌生物を含む生態系等が明らかになるに従い、中低緯度海域を含めた包括的な調査研究の必要が増大することは十分に予想される。

将来的には、南極海との比較研究のためシロナガスクジラ、ザトウクジラ、セミクジラを対象とした自然標識撮影調査、皮膚バイオプシー採集調査を時間の許す限り積極的に実施する必要があり、解析面ではSOWER往復航海における中低緯度目視調査データや南極海における目視データと合わせた解析も検討する必要がある。

本報では9年分のデータを用いたが、緯度毎の探索距離分布が示すように、往復航海中の短い調査日程と暴風圏を含む激しい気象海況下の調査では、得られるデータ量にも限界がある。

広大な海域における季節的な鯨類の分布を解明するための新たな組織的調査計画が望まれている。

## 6. 謝 辞

本調査に参加した調査員、調査船船長、航海士並びに乗組員の方々の御努力に深く感謝申し上げます。

## 7. 引用文献

- Dawbin, W. H. 1966. The seasonal migratory cycle of humpback whales. 145-170. In: Norris, K.S. (ed.) *Whales, Dolphins, and porpoises*. University of California Press, Berkeley. i-xv+789pp.
- 笠松不二男. 1993. 南極海に出現する鯨類資源の分布、回遊および資源量に関する研究. 東京大学, 262pp.
- Kasamatsu, F., Nishiwaki, S., Ishikawa, H. 1995. Breeding areas and southbound migrations of southern minke whales *Balaenoptera acutrostrata*. *MARINE ECOLOGY PROGRESS SERIES* 119:1-10.
- Kasuya, T. and Wada, S. 1991. Distribution of large cetaceans in the Indian Ocean: data from Japanese sighting records, November-March. 139-170. In: Leatherwood, S. and Donovan, G.P. (eds.) *Cetaceans and cetacean research in the Indian Ocean Sanctuary. Marine Mammal Technical Report Number 3*. United Nations Environment Programme, Nairobi, Kenya. 287pp.
- 河村章人. 1971. 南極海の海洋生物. 月刊海洋科学 3(7):37-46.
- 町田三郎. 1973. 第16興南丸による南氷洋IV・V・VI区での探鯨調査航海. 鯨研通信 264:167-174.
- 町田三郎. 1974. Australia - New Zealand区南極洋における海洋前線の位置. 鯨研通信 269:1-5.
- Matsuoka, K. and Ohsumi, S. 1995. Yearly trend in population density of large baleen whales in the Antarctic Areas IV and V in recent years. Paper SC/47/SH9 presented to the IWC Scientific Committee, June 1995 (unpublished). 25pp.
- Matsuoka, K., Fujise, Y., Pastene, L.A. 1996. A sighting of a large school of the pygmy right whale, *Caperea Marginata*, in the Southeast Indian Ocean. *MARINE MAMMAL SCIENCE* 12(4): 594-597.
- Miyashita T., Kato H., Kasuya T. 1995. *Worldwide Map of Cetacean Distribution based on Japanese Sighting Data (Volume 1)*. National Research Institute of Far Seas Fisheries, 140pp.

# ミンククジラの鯨体部位の名称

銭谷亮子 (日本鯨類研究所)

## 1. はじめに

古くからクジラのあらゆる部位を食料として利用してきた日本では、その鯨体部位について、“潮吹(しおふき)”、“いぼ”、“さい”、“手羽(てば)”、“豆わた”、“百尋(ひやくひろ)”など独特な名称が用いられてきた。このような鯨体部位の名称の一部は地方によっても若干異なっていたようである。

母船式捕鯨が始まり、船団へ各捕鯨基地出身者が集まることにより、またその後の数社あった捕鯨会社の捕鯨部の統合(日本共同捕鯨株式会社)などによって、鯨体部位も徐々に共通する名称が、その他の生活用語(捕鯨用語)とともに用いられるようになってきた。

当研究所が1987年から開始した捕獲調査は、これらの商業捕鯨時代から培われたクジラの目視(発見)、捕獲、解体技術を持った人達の強い協力のもとに推進してきた。調査開始当時は、クジラの部位名称についても調査員が解剖長(現在の解剖リーダー)やそのスタッフに尋ねまわったものである。しかしながら、この商業捕鯨時代に培われた技術や知識を持った熟練者も、捕獲調査が10年たった現在、定年退職して数少なくなり、近年は新人や中途採用者が増加し、乗組員の大半を占めるようになってきた。また、商業捕鯨時代に使用されていた部位の名称も捕獲調査が継続するとともに、生物学的名称へと修正を行ってきているが、新世代への交代によって、調査母船の乗組員や調査員の中にも商業捕鯨時代から捕獲調査の初期までの間に用いられていた鯨体部位の名称を知らない人間が増えつつある。特に、ほとんどの熟練者がこの数年で定年退職してしまう現況から考えると、今のうちに、主に商業捕鯨時代に使用されていた名称(旧称)と現在調査で使用している

名称との関係を明らかにし、記録に残しておく必要がある。そこで、本報では、これらの諸事情を勘案して、調査航海中に行ったこれらの熟練者への聞き取り調査及び文献調査をもとに、過去の鯨体部位の名称(旧称)と現在捕獲調査で使用している名称の関係を明らかにし、同時に現在の副産物の名称についても紹介する。

## 2. 鯨体部位の名称

鯨体部位の名称は、日本共同捕鯨(株)に統合された時点である程度統一され(河島, 1979a)、捕獲調査開始当時は基本的には、日本共同捕鯨(株)時代の部位名称がそのまま用いられていた。

### 2.1 外部形態の名称

生物調査項目の中には外部形態の観察やプロポーシオン計測があり、決められた部位の写真を撮影したり、長さを測っている。そのいくつかの部位も旧称が使われていた。図1に現在調査で用いている名称を過去の様々な旧称とともに示した。

外部形態の名称の中で旧称が残っていたものは、主にクジラヒゲ、上顎先端、噴気口、胸鰭、背鰭、尾鰭、外部生殖器等である。

ヒゲクジラ類の特徴である上顎から生えているクジラヒゲは“おさ”と呼ばれているが、その他にも“えら”や“ひげ”(在原, 1954)、“えんば”(柴, 1988)という呼び方もある。上顎先端は“吻端”、噴気口(ふんきこう)は“潮吹(しおふき)”、胸鰭は“手羽(てっぱ)”あるいは“立羽(たっぱ)”、背鰭は“いぼ”、尾鰭は“尾羽(おぼ)”、雄の生殖器は“たけり”、雌のそれは“ふけり”と呼ばれていた。さらに背鰭には“たちひれ”、尾鰭には“尾羽毛(おぼけ、おぼいけ)”や“海老の尾(えびのお)”(在原,

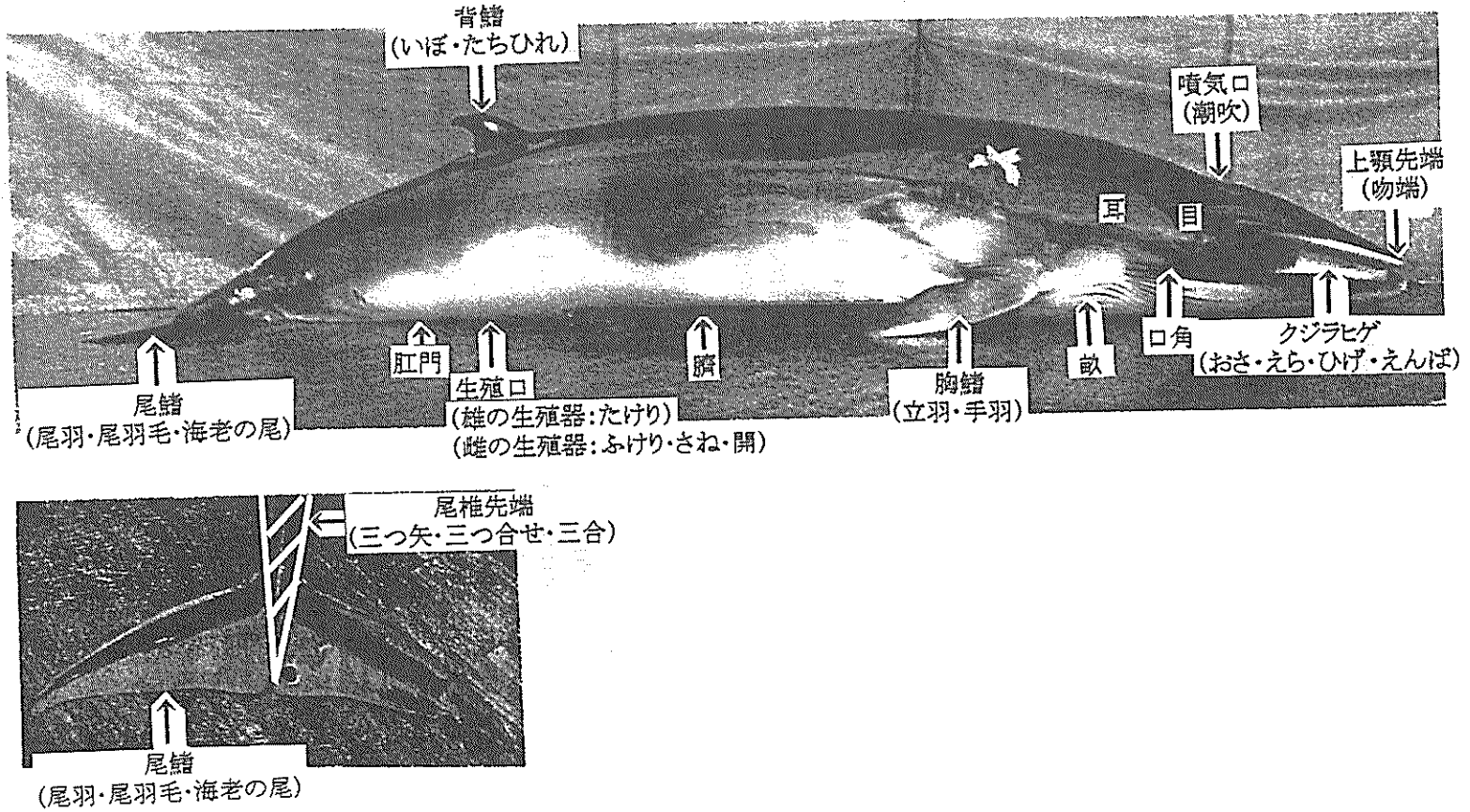


図1. 外部形態の名称。( )は旧称を示す。

1954)、雌の生殖器には“さね”(滝谷, 1983)あるいは“開(かい)”(在原, 1954)という呼び方もある。

また、尾鰭の尾椎が存在する部分は特に“三つ矢(みつや)”と呼ばれていたが、現在は尾椎先端と言う名称を用いている。“三つ矢”には“三つ合せ”(在原, 1954; 柴, 1988; 藤井, 1989)、“三合(みつあい)”(在原, 1954)と言う呼び方もある。

## 2.2 脂皮

脂皮は一般的に皮と呼んでいる部分である。

背側の頭部から尾部まで、及び腹側の臍から尾部までを覆っている皮はこれまで総称して“本皮(ほんかわ)”と呼ばれていた(河島, 1976b)。また、その他には“脂肪皮(しぼうかわ)”や“白身(しろみ)”, また、赤肉以外の脂皮の総称として“白肉(しろにく)”とも呼ばれていた(在原, 1954)。さらに古くは、“本皮”はマッコウクジラの脂皮を言い、ヒゲクジラの脂皮のことは“脂皮(あぶらかわ)”と呼んでいたようである(西脇, 1957)。図2に脂皮の名称を示した。

脂皮は現在、頭皮(あたまかわ)、背皮(せかわ)、畝(うね)、腹皮(はらかわ)に大きく分けている。外部形態で説明した背鰭及び尾鰭も脂皮の一部に含まれる。

頭皮とは耳の辺りから前方の頭部の脂皮を指し、調査開始当時は“脳皮(のうかわ)”と呼ばれていた。また、古くは“潮吹”とは噴気口の名称であったが、現在では噴気口部分の脂皮にこの名称が用いられている。

体側中央を境にして背中側の脂皮を背皮、畝の部分を除いた腹側のそれを腹皮と、さらに背皮及び腹皮の背鰭から尾鰭にかけての正中部分の背中側は背山皮(せやまかわ)、腹側は腹山皮(はらやまかわ)と呼んでいる。

下顎の前端から臍の前方にかけてある畝(縞状の凹凸部分)の部分の脂皮はそのまま畝と呼んでいる。さらに畝の部分の脂皮は表面の凹凸から肉質を伴わない部分を畝、その内側の引き締まった肉質の部分を須の子(すのこ)、さらにその内側の軟らかい肉質部分を須払(すばらい)と分けて呼んでいる。畝に須の子が付い

たものは畝須(うねす)と呼ぶ。

また、背皮の部分の脂皮と筋肉との境界になる筋膜は三の皮、腹皮に須の子状の肉質部分が付いたものを皮須(かわす)と呼んでいる。

その他の脂皮の名称には、下顎骨を覆っている部分の嘴皮(はしかわ)や上顎骨外縁(ヒゲ板列外縁)部分の丸皮(まるかわ)等があり、胸鰭には水切(みずきり)と脈つぼ(みやくつぼ)と呼んでいる部分がある(図2参照)。

また、皮とは様相が異なるが、頭部を胴体部分より切り離した際に見られる上顎骨と下顎骨の付け根周辺部分の結締組織を伝胴(でんどう)と呼んでいる。

脂皮の中で、山皮、須の子、伝胴には旧称が残っており、山皮と言う名称は“鞍皮(くらかわ)”や“馬の鞍(うまのくら)”(在原, 1954)、須の子は“敷肉(しきにく)”, 伝胴は“目皮(めかわ)”(在原, 1954; 柴, 1988; 藤井, 1989)との呼び方がある。さらに伝胴は山口県では“坊主(ぼうず)”と呼ばれていたようである(在原, 1954)。

## 2.3 筋肉

筋肉とは一般に言う肉のことである。

現在筋肉の名称は、頭肉(あたまにく)、背肉(せにく)、腹肉(はらにく)、胸肉(むなにく)、肋肉(あばらにく)、三角肉(さんかくにく)、扇肉(おうぎにく)に大きく分けられ、さらに部分的には尾の身(おのみ)、鹿の子(かのこ)、頬肉(ほほにく)、伝胴肉(でんどうにく)等のような細かな名称が付いている(図3)。

頭肉は、捕獲調査開始当時には“脳肉(のうにく)”と呼ばれており、頭部に付着している筋肉全部を指し、主に目の上側部分にある筋肉の頬肉と上顎骨と下顎骨の付け根の伝胴部分を覆っている筋肉の伝胴肉がこれに含まれる。伝胴肉には“でんずる”という呼び方もある(藤井, 1989; 岡山, 1995)。

下顎骨の付け根からその中央にかけての嘴皮の部分で、脂皮の内側に、脂肪の中に筋肉が鹿の子状に点在している肉質部分を特に鹿の子と呼ぶ。さらに現在は潮吹や舌先の部分においても脂肪の中に筋肉が点在したような鹿の子状の

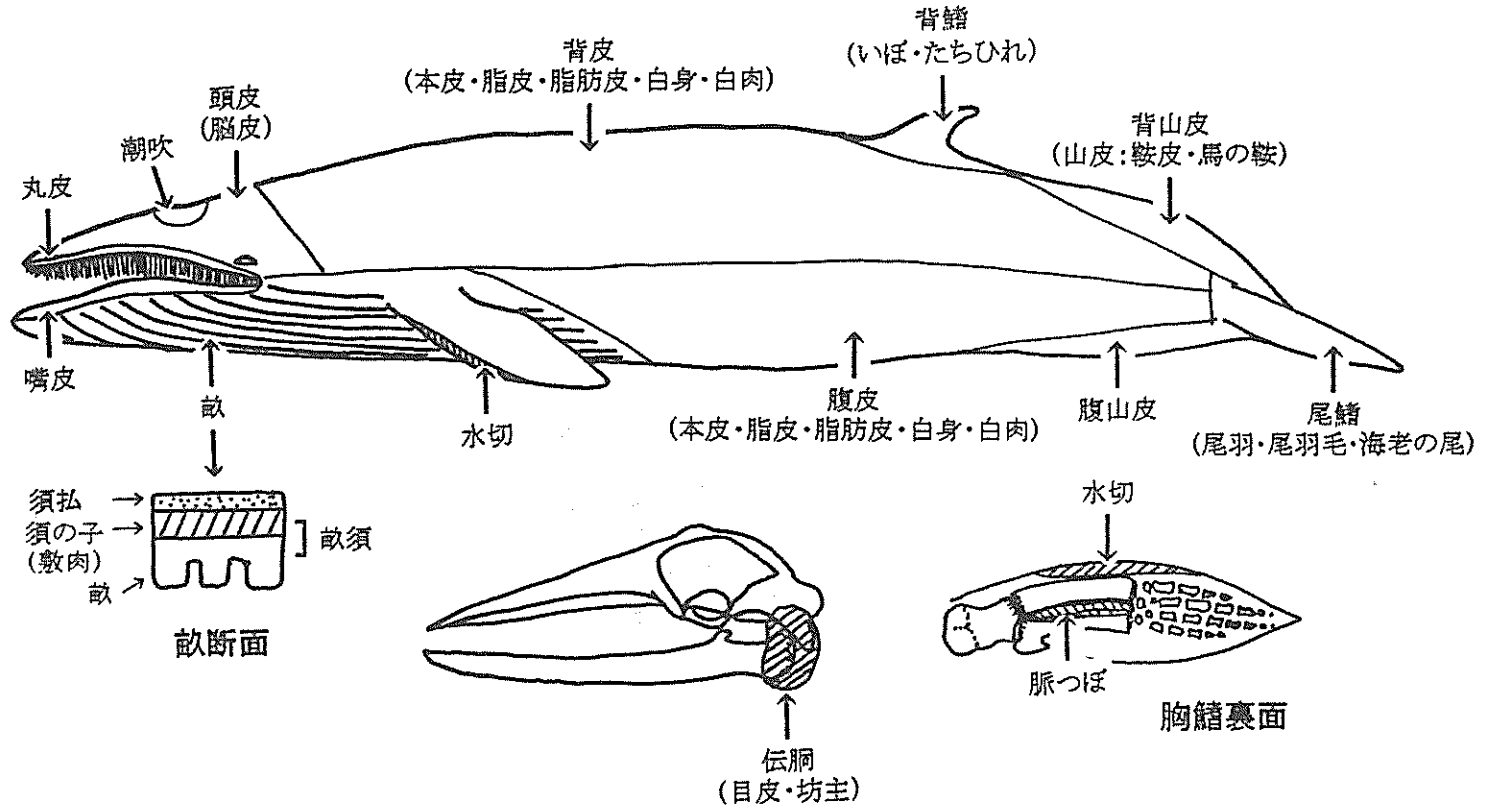


図2. 脂皮の名称。( )は旧称を示す。



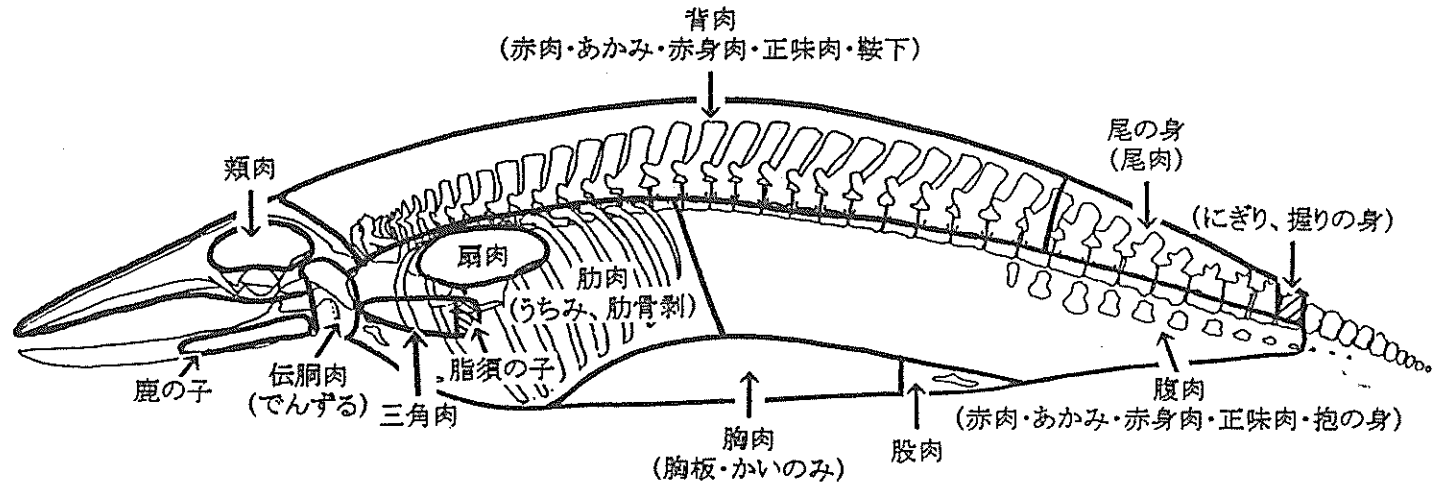


図3. 筋肉の名称。( )は旧称を示す。

肉質部分が認められた場合には、「鹿子徳用」や「舌鹿子」として副産物を製造している。

脊椎骨の横突起を境に背中側を背肉、腹側を腹肉、肋骨部分を覆っている筋肉を肋肉、内臓部分を覆っている胸部の筋肉を胸肉と呼んでいる。背肉のうち背鰭から尾鰭にかけての部分特に尾の身（おのみ）と呼び、胸肉のうち生殖器（骨盤痕跡）周辺部分の筋肉を股肉（またにく）と呼んでいる。また、三の皮（筋膜）付きの筋肉のことを特に白剥（しらはぎ）と区別して呼んでいる。

これまでは、特に背肉と腹肉を主体とした筋肉は一般的に“赤肉（あかにく）”と呼ばれていた（河島, 1979b）。“赤肉”には“あかみ”（在原, 1954）、また“赤身肉（あかみにく）”や“正味肉（しょうみにく）”（滝谷, 1986）等の呼び方もあり、背肉は“鞍下（くらした）”（西脇, 1957）、腹肉は“抱の身（だきのみ）”（在原, 1954）とも呼ばれていた。

また以前は肋肉と胸肉を合わせた胸部の肉のことを“胸肉”と呼び（河島, 1979b）、現在の胸肉の部分は“胸板（むないた）”（河島, 1979b; 真野, 1994; 西脇, 1957; 在原, 1954）と呼ばれていた。“胸板”は“かいのみ”との呼び方もあり、肋肉には“うちみ”（岩田, 1988）、あるいは“肋骨剥”（真野, 1994）との呼び方もある。

尾の身は“尾肉（おにく）”とも呼ばれており、統合される前の捕鯨会社によって呼び方が異なっていたようである。さらに尾の身のうち尾部側の最も細い部分は“にぎり”、あるいは“握りの身（にぎりのみ）”と呼ばれていた（在原, 1954）。

肩胛骨を覆っている筋肉は扇肉と呼び、下顎骨付け根から胸鰭付け根にかけて見られる腹側の表層の筋肉を三角肉、さらに三角肉のうち胸鰭付け根部分で脂肪分と肉質が半々で縞状になっているような筋肉の部分特に脂須の子（あぶらすのこ）と呼んでいる。

## 2.4 臓器・その他

臓器は、現在では生物学的名称を用いているが、これらは古くから食してきたことから、様々な旧称が残っており、それを表1に示した。

臓器の中には旧称が残っているものが多く、調査開始当時も舌は“さえ”、食道は“ひめわた”、横隔膜は“巻き肉”、腎臓は“まめ”あるいは“まめわた”、小腸は“百尋”という旧称がしばらくは使われていた。舌にはさらに“さえずり”（松井, 1988; 岩田, 1988; 藤井, 1989; 柴, 1988）、“さや”（真野, 1994; 岡山, 1995）、“さい”（板橋, 1986; 在原, 1954）、“さいころ”（滝谷, 1983）、食道には“ひめ”（柴, 1988; 真野, 1994; 岡山, 1995）、横隔膜には“だんばら肉”（在原, 1954）と言う呼び方もある。

気管は“喉輪（のどわ）”（岡山, 1995）との呼び方や、肺には、“吹腸（ふきわた）”または“ふくわた”（在原, 1954; 柴, 1988; 藤井, 1989; 板橋, 1986; 岡山, 1995; 奈須, 1990）、“ふく”（松井, 1988）との呼び方もある。さらに“あかふく”という方言が山口県に残っている（在原, 1954）。肝臓は“きも”（松井, 1988; 岩田, 1988）あるいは“殻肝（からきも）”（滝谷, 1983）、脾臓は“鳥賊腸（いかわた）”（板橋, 1986; 松井, 1988; 真野, 1994; 藤井, 1989; 岡山, 1995; 在原, 1954; 奈須, 1990）、心臓は“丸（まる）”（柴, 1988; 藤井, 1989; 奈須, 1990）、“うす”（松井, 1988; 真野, 1994; 藤井, 1989; 奈須, 1990; 岡山, 1995）、“内赤身（うちあかみ）”（在原, 1954）と呼ばれていた。胃は“丁子（ちょうじ）”（藤井, 1989; 奈須, 1990）、“内さえずり”（柴, 1988; 藤井, 1989; 在原, 1954）、“白さえ”（在原, 1954）、大腸は“おおわた”（松井, 1988; 岡山, 1995; 奈須, 1990）、十二指腸は“赤腸（あかわた）”（滝谷, 1983; 岡山, 1995; 奈須, 1990）、子宮は“子袋（こぶくろ）”（岡山, 1995; 奈須, 1990）、睾丸は“きんつう”や“たま”（滝谷, 1983; 1986）、膀胱は“小便袋（しょうべんふくろ）”（岡山, 1995）と呼ばれていた。

クジラヒゲの生えている基部組織の真皮突起（歯茎にあたる部分）のことを現在も“びり”と呼んでいるが、これ以外の呼び方としては“おさね”、“小ひげ”、“はぐき”等がある（板橋, 1986; 滝谷, 1983; 1986; 柴, 1988; 藤井, 1989; 在原, 1954; 岡山, 1995）。捕鯨業附表（1954）によると、“びり”は五島での呼び方であり、山口県では“しか”と呼ばれていたようである。

尾鰭の付け根付近にある太い腱を現在も“棒

表1. 臓器・その他の名称

臓器・その他の名称	旧称
舌	さえ、さえずり、さや、さい、さいころ
食道	ひめわた、ひめ
気管	喉輪(のどわ)
肺	吹腸(ふきわた)、ふくわた、ふく、あかふく
横隔膜	巻き肉(まきにく)、だんぼら肉
胃	丁子(ちょうじ)、内さえずり、白さえ
心臓	丸(まる)、うす、内赤身(うちあかみ)
脾臓	
肝臓	きも、殻肝(からきも)
腎臓	豆腸(まめわた)、まめ
脾臓	烏賊腸(いかわた)
十二指腸	赤腸(あかわた)
小腸	百尋(ひやくひろ)
大腸	大腸(おおわた)
子宮	子袋(こぶくろ)
卵巣	
睾丸	きんつう、たま
副睾丸	
膀胱	小便袋(しょうべんふくろ)
大脳	
小脳	
真皮突起	びり、おさね、小ひげ、はぐき、しか
上顎骨中央軟骨	かぶら、燕骨(かぶらぼね)、つき骨
咽頭口蓋軟骨	のどちんこ
腱	棒筋(ぼうすじ)、丸筋(まるすじ)

筋(ぼうすじ)”と呼んでいるが、以前は“丸筋(まるすじ)”(西脇, 1957; 藤井, 1989; 在原, 1954)と呼んでいた。

上顎骨中央にある軟骨のことを“かぶら”、“燕骨(かぶらぼね)”と呼んでいるが、“つき骨”(在原, 1954)という呼び方もある。また、咽頭口蓋軟骨のことは現在も“のどちんこ”と呼んでいる。

## 2.5 骨

調査項目のひとつである骨格の詳細計測を船上で行う場合や、また、外部機関等からの骨格標本の採集依頼があった場合には、乗組員の協力の下に、胸鰭を除いた全ての骨はそれぞれの骨の部位ごとに解剖を行い、骨単位でラベル付けを行う。図4に骨の名称を示した。

ミンククジラの骨格の名称は現在、頭骨(とうこつ)、下顎骨(かがくこつ)、舌骨(ぜつこつ)、胸骨(きょうこつ)、肋骨(ろっこつ)、

肩胛骨(けんこうこつ)、脊椎骨(せきついこつ)、V字骨(ぶいじこつ)、骨盤痕跡(こつばんこんせき)を用いている。

頭骨はさらに細かく上顎骨(じょうがくこつ)、前上顎骨(ぜんじょうがくこつ)、鋤骨(じょこつ)、後頭骨(こうとうこつ)、側頭骨(そくとうこつ)、頬骨(きょうこつ)、涙骨(るいこつ)等の骨から成る。

脊椎骨は頸椎(けいつい)、胸椎(きょうつい)、腰椎(ようつい)、尾椎(びつい)の4つの部分から成る。首の部分の脊椎骨を頸椎、肋骨が付着している部分のそれを胸椎、下方にV字骨と呼ばれる骨が付着している部分のそれを尾椎、胸椎と尾椎の間で肋骨もV字骨も付着していない脊椎骨を腰椎と言う。舌骨は舌の基部付近にあり、胸骨は前部の肋骨の先端部分にあり、骨盤痕跡は生殖器周辺に左右一対ある。

胸鰭が付着している骨が肩胛骨で、その胸鰭は上腕骨(じょうわんこつ)、尺骨(しゃっこ

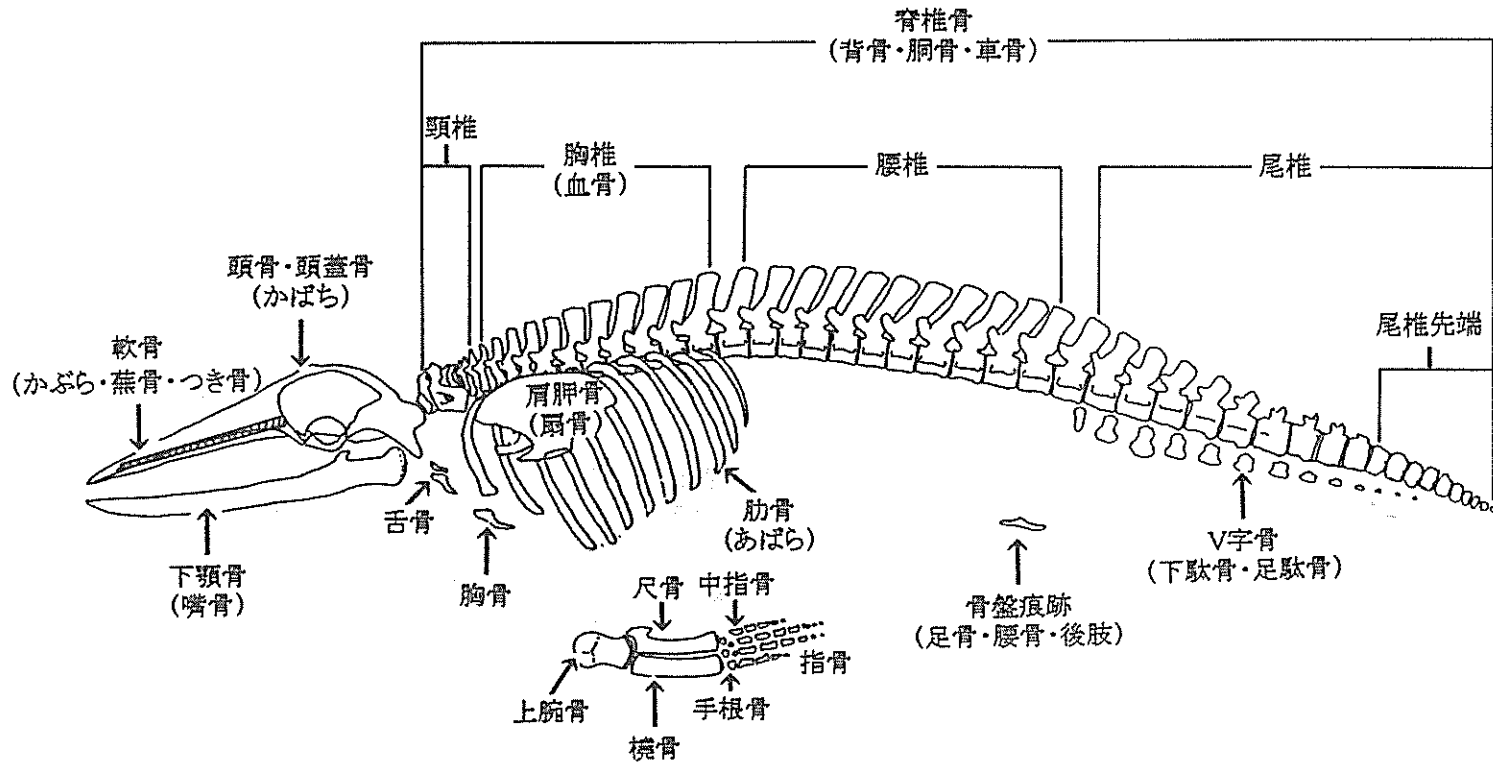


図4. 骨の名称。( ) は旧称を示す。

つ)、橈骨(とうこつ)、手根骨(しゅこんこつ)、中指骨(ちゅうしこつ)、指骨(しこつ)の骨から成る。

調査開始当時、骨の名称としては、下顎骨は“嘴骨(はしぼね)」、脊椎骨は“背骨(せぼね)”または“胴骨(どうぼね)」、V字骨は“下駄骨・足駄骨(げたぼね)」、骨盤痕跡は“足骨(あしぼね)」、肋骨は“あばら”、肩胛骨は“扇骨(おおぎぼね)”が使われていた。骨盤痕跡は“腰骨(ようこつ)”(西脇, 1957)や“後肢(うしろあし)”(河島, 1979 a)とも呼ばれており、頭骨には“かばち”、脊椎骨には“車骨(くるまぼね)」、胸椎には“血骨(ちぼね)”という呼び方もあった(在原, 1954)。

調査では骨盤痕跡という名称を用いているが、神谷(1997)は骨盤骨という名称を用いている。

### 3. 副産物の名称

現在、捕獲調査で採集されたミンククジラは生物調査が終了した時点で、骨と一部の内臓・器官を除いて、そのほとんどを副産物(冷凍品)として製造している。骨や一部の内臓・器官から鯨油を製造しているが、これは副産物とはせずに船の燃料として消費している。

ここでは、上述したそれぞれの鯨体部位から現在生産されている副産物について簡単に紹介する(表2)。

副産物は、11×29×43cmの金属のパンと呼ばれる容器に詰め冷凍されるものと、パンには詰められないため袋詰め(空冷物と呼ぶ)にして冷凍するものがあり、パン詰めは15kg、空冷物は25kgを基本重量としている。さらに、パンに詰める時の切数の制限や1切れの最低重量、詰め方、製造基準が決められた製品規格表に従ってそれぞれの品名に分類される。

#### 3.1 外部形態

尾鰭は、「尾羽」と言う品名で袋詰めされる。背鰭は尾椎先端部分の脂皮とともに「尾羽徳用」として袋詰めされる。クジラヒゲは過去には工芸品の材料として採集されたこともあったが、現在は採集していない。

#### 3.2 脂皮

脂皮からは主に「本皮」、「皮」、「畝須」等の副産物が製造される。

##### 3.2.1 頭皮

頭皮のうち、噴気口の部分の脂皮は「潮吹」と言う品名で袋詰めされ、噴気口を除いた頭皮は「皮徳用」として袋詰めされる。また噴気口(潮吹)の部分で鹿の子状の肉質が認められた場合には、その部分だけを採取し「鹿子徳用」としてパン詰めされる。

##### 3.2.2 背皮・腹皮

背・腹山皮を除いた背皮・腹皮は「本皮」という品名でパン詰めされる。皮の厚さ、サイズ、切数等により「本皮特選」と「本皮1級」に区分される。さらに「本皮」採取後の最低寸法に満たないものや切れ端等は「皮徳用」として、また、腹皮のうち須の子の付いたものは「皮須」として袋詰めされる。背山皮及び腹山皮は「皮徳用」となる。「本皮」採取時に発生した三の皮だけをパン詰めしたものを「皮払」という。

##### 3.2.3 畝

畝の部分からは「畝須」、「畝」、「須の子」の3種類の副産物が製造される。

「畝須」は畝と須の子の割合とサイズや切数等によって「畝須1級」と「畝須2級」に分けられ、さらに1、2級に格付けできないものは「畝須小切」となる。須の子が付いていないものは「畝」としてパン詰めされ、須の子や須払だけをパン詰めしたものを「須子」と言う。

##### 3.2.4 嘴皮、その他

嘴皮のうち、鹿の子部分はその部分だけを採取し「鹿子1級」としてパン詰めされ、それを除いた嘴皮は、水切や丸皮、背・腹山皮等と一緒に「皮徳用」として袋詰めされる。

伝胴は組織の硬さによって、「伝胴(硬)」と「伝胴(軟)」の2種類に分け、パン詰めされる。

表 2. 副産物の名称

脂皮名称	副産物名	筋肉名称	副産物名
尾鰭	尾羽	頭肉 (類肉・伝胴肉)	赤肉徳用
尾椎先端	尾羽徳用	頭肉	小切
背鰭	尾羽徳用		加工小切
頭皮	潮吹	背肉 (尾の身)	尾肉
	鹿子徳用		尾肉徳用
	皮徳用		赤肉特選
背皮	本皮特選	背肉	赤肉
	本皮1級		小切
	皮徳用		加工小切
背皮 (背山皮)	皮徳用		胸肉
背皮 (三の皮)	皮払		胸肉 2級
腹皮	本皮特選		胸肉 3級
	本皮1級		白剥
	皮徳用	腹肉	赤肉
	皮須		小切
腹皮 (腹山皮)	皮徳用		加工小切
畝	畝須 1級		胸肉
	畝須 2級		胸肉 2級
	畝須小切		胸肉 3級
	畝	胸肉	胸肉
	須子		胸肉 2級
嘴皮	鹿子 1級		胸肉 3級
	皮徳用		小切
水切	皮徳用		加工小切
丸皮	皮徳用	肋肉	胸肉 2級
伝胴	伝胴 (硬)		胸肉 3級
	伝胴 (軟)		肋肉
			小切
			加工小切
臓器・その他名称	副産物名		
舌	舌鹿子	三角肉	脂須の子
	舌		胸肉
	舌徳用		胸肉 2級
食道	食道		胸肉 3級
横隔膜	巻肉		小切
心臓	心臓		加工小切
腎臓	腎臓	扇肉	胸肉 2級
脾臓	脾臓		胸肉 3級
第1胃	胃		小切
第2胃	第2胃		加工小切
第3胃、4胃	第3・4胃	その他 (雑肉)	小切
小腸	百尋		加工小切
大腸	大腸		たき肉
睪丸	睪丸		
軟骨 (上顎中央)	かぶら		
(胸鰭、肩胛骨)	軟骨		
腱	棒筋		
	筋		
筋膜	筋		

### 3.3 筋肉

筋肉からは主に「尾肉」、「赤肉」、「胸肉」等の副産物が製造される。筋肉の部位、鮮度、肉色、脂のり、肉質（軟らかい、硬い）、肉目（細かい、粗い）、切数及び1切れの最低重量等によって等級（品名、特選、2～3級、徳用等）が決められる。

#### 3.3.1 頭肉

頭肉のうち、頬肉及び伝胴肉は「赤肉徳用」、それ以外は「小切」や「加工小切」等としてパン詰めされる。

#### 3.3.2 背肉・腹肉

背肉・腹肉が「赤肉」の主体となる。背肉のうち、尾の身の部分の肉は脂のりの状態、肉質等によって「尾肉」、「尾肉徳用」、「赤肉特選」に分類され、パン詰めされる。

尾の身部分を除いた背肉と腹肉は「赤肉」としてパン詰めされる。不定形の場合は「小切」としてパン詰めされる。また、これらには格付けできない場合には「胸肉」、「胸肉2級、3級」や筋の無い小片肉は「加工小切」としてパン詰めされる。

また、三の皮（筋膜）が付いた赤肉は「白剥」としてパン詰めされる。

#### 3.3.3 胸肉・肋肉

胸肉は鮮度、硬直具合、脂のりの状態によって「胸肉」、「胸肉2級、3級」に分類され、パン詰めされる。

肋肉のうち脂のりが良い肉は「胸肉2級」、これに格付けできないものは「肋肉」、「胸肉3級」としてパン詰めされる。

さらに肉質や大きさによっては「小切」や「加工小切」としてもパン詰めされる。

#### 3.3.4 三角肉、扇肉

三角肉のうち、脂須の子の部分は「脂須の子」としてパン詰めされ、それ以外の部分は「胸肉」、「胸肉2級、3級」に分類され、パン詰めされる。

また、扇肉は「胸肉2級、3級」としてパン詰めされる。

さらに肉質や大きさによっては「小切」や「加工小切」としてもパン詰めされる。

#### 3.3.5 その他（雑肉）

上述したような筋肉の副産物には格付けされない小片の筋肉（切れ端）や骨から剥ぎ取った筋肉（骨剥ぎ肉）等は、極力「加工小切」や「胸肉3級」としてパン詰めされるが、これらにも格付けできない場合には「たき肉」としてパン詰めされる。また、製造過程の急冷後の整形時に生じる赤肉類の切れ端は「胸肉徳用」としてパン詰めされる。

### 3.4 臓器・その他

舌は「舌」と「舌徳用」に分類し、さらに特に舌先の鹿の子状部分はその部分だけを採取し「舌鹿子」としてパン詰めする。血廻り（血液が滲む）した舌は「舌徳用」として格下げされる。

食道は「食道」、横隔膜は「巻き肉」、心臓は「心臓」、腎臓は「腎臓」、脾臓は「すい臓」として、パン詰めされる。第1胃～4胃まである胃のうち、第1胃は「胃」として、第2胃が鮮度良好な場合には「第2胃」とし、第3胃、第4胃は「第3・4胃」としてパン詰めされる。小腸は「百ひろ」として、大腸は「大腸」として、睾丸は「睾丸」としてパン詰めされる。これ以外の臓器については副産物としては生産されていない。

上顎骨中央にある軟骨は「かぶら」として袋詰めされ、胸鰭や肩胛骨等の軟骨部分は「軟骨」として袋詰めされている。腱は1cm以上の太さのものは「棒筋」とし、それ以外の腱や筋膜は「筋」としてパン詰めされる。

## 4. おわりに

以上のように鯨体部位の名称について述べてきたが、河島（1979a）によれば、日本共同捕鯨（株）になった時点で、すでに鯨体各部の名称のうち、昔ながらの名称が記述されているものは“潮吹”、“いぼ”、“三ツ矢”、“手羽”、“尾羽”、“胴骨”、“嘴骨”、“扇骨”、“後肢”、“百尋”、“まめ”くらいのものであり、その他の名称は

現在と同じ名称が使われるようになっていた。

従って、この時点で、それ以前に使われていた名称が伝え継がれているものもあったが、すでに昔ながらの名称のいくつかは消えてしまった可能性がある。

さらに溯れば、旧捕鯨会社の間で“尾の身”と“尾肉”のように部位名称が異なっていたように、同じ部位でも各捕鯨会社によって呼び方が異なっていたり、名称は同じでも指している部位が異なっているような可能性がある。また、クジラヒゲのように“おさ”が土佐や紀州では“えんば”、大阪では“ひげ”と呼び方が若干異なっているように、鯨体の部位の名称がいくつか存在するものは地方で呼び方が異なっていた可能性もあるが、ここでは全てを明らかにすることができなかった。

また、鯨体の部位名称や解体方法及びその用途（食べ方）についてはかなり古くから記載されており、1808年に大槻清準によって書かれたと考えられている鯨史稿（1976）にはクジラの外部形態、臓器、骨格の名称が図解され、解体方法やその利用（食べ方）方法についても詳しく説明されている。上述してきた部位の旧称も鯨史稿に図解されている名称がそのまま用いられているものもかなりある。クジラはその当時から肉や皮だけでなく、臓器も食料として利用されており、1832年には当時の鯨料理の専門書「鯨肉調味方」が出版され、鯨の部位を70箇所挙げ、その内の可食部位68箇所の食べ方を解説していると言われている（岡山, 1995）。

先に述べた旧称のうち、クジラヒゲ、噴気口、胸鰭、背鰭、尾鰭、食道、腎臓、小腸、肋骨、肩胛骨等は、鯨史稿に記載されていた名称がそのまま引き継がれて使われていたが、200年近くの間全く変わらず引き継がれてきたことは驚くべきことである。鯨史稿（1976）には、舌はすでに当時から“さや”、“さえ”、“さえつり”と数種の呼び方があると記載されており、また、伝胴肉は平戸では“でんずる”、唐津では“でんとう”、尾鰭は西海では“おはけ”、紀州では“おはき”、中国では“おはいけ”と言うように地方によって呼び方が異なっていると記載されている。鯨体の部位名称には、鯨史稿（1976）に記載されている名称がその後そのまま変化す

ることなく引き継がれてきたものがある一方、鯨史稿（1976）に記載されている名称とは全く異なった名称が伝えられているものもある。これらは捕鯨方法の変化や捕獲鯨種の変化、鯨体利用法の変化、食文化の変化等によって、数種あった名称の統一化や古くからあった名称の消失、または新たな名称の出現が起こったのではないかと考えられる。

## 5. 謝辞

調査員として乗船中に鯨体の部位名や副産物名に関していろいろ教えていただいた調査母船日新丸乗組員の皆様方に深謝致します。また、本報を作成するにあたり副産物の製造に関する資料のご提供ならびにコメントを頂きました根本勝雄氏（共同船舶株式会社）にお礼申し上げます。最後に、本報を完成するにあたり有益なコメントをいただいた当研究所職員諸氏にお礼申し上げます。

## 6. 参考文献

- 在原千秋. 1954. 水産講座漁業篇第9巻捕鯨業附表. 大日本水産会, 東京. 41pp.
- 藤井久. 1989. 鯨の化学. 幸書房, 東京, 210pp.
- 板橋守邦. 1986. 鯨と人間をめぐる30章. 日本捕鯨協会, 東京, 64pp.
- 岩田一平. 1988. 今は昔クジラ料理となむありけり. 食 29:13-17.
- 神谷敏郎. 1997. 水生哺乳類の骨格. *THE BONE* Vol.11.No. 4:123-130.
- 河島成和. 1979a. 鯨の処理法. 食の科学 48: 59-67.
- 河島成和. 1979b. 鯨の生産物. 食の科学 48: 71-76.
- 松井進. 1988. 和歌山県太地町における鯨文化史考. 食 29: 2-12.
- 真野季弘. 1994. 長崎は鯨食文化の郷. 90-95. 長崎の食文化. タウンニュース社, 長崎. 127pp.
- 奈須敬二. 1990. 捕鯨盛衰記. 光琳, 東京. 229pp.
- 西脇昌治. 1957. 南氷洋の捕鯨. 保育社, 大阪. 120pp.
- 大槻清準. 1976. 鯨史稿. 青木園夫他編 江戸科学 古典叢書 2. 恒和出版, 東京. 538+31pp.
- 岡山芳治. 1995. 『鯨肉調味方』について.



柴達彦. 1988. 鯨と日本人. 洋泉社, 東京. 280pp.

滝谷節雄. 1983. 鯨のなんでも博物誌. 講談社, 東

京. 190pp.

滝谷節雄. 1986. いま、鯨への讃歌. シーズ, 東京. 214pp.

## 日本鯨類研究所関連トピックス (1997年12月～1998年2月)

### 職員の採用及び退職

12月8日付けで、細根 弓を総務部に採用した。また、1月16日付けで、総務部総務課柴田陽一郎が退職した。

### 大隅理事長の年頭合同記者会見

1月13日当研究所会議室において、水産記者クラブメンバー11名による年頭に当たっての合同記者会見が行われ、理事長は最近の捕鯨を巡る情勢と今後のあり方について語った。

終了後、出席された記者の方々と当研究所役員と懇談会を開き、鯨類に関する研究、IWCの運営状況等について懇談した。

### 平成9年度広報企画委員会の開催

1月14日当研究所において、平成9年度広報企画委員会が開催された。委員会では、水産庁担当官から捕鯨を巡る現状についての説明があり、事務局から平成8年度海外広報活動の経過及び今後の広報活動事業の検討項目について説明を行った。委員からは海外向、国内向の広報活動についてタイアップした活動が必要であること、もっと捕鯨問題を知らない人への啓蒙普及を考えるべきである等の意見が出された。

### 来年度以降の調査計画検討会議の開催

1月19日から22日までの間、来年度以降の捕

獲調査、目視調査についての計画案を検討する会合が当研究所会議室で行われた。国内の関係研究者のほか、海外から4名の科学者が参加した。当研究所はIWC科学委員会やこうした会合を通して得られた意見に基づいて毎年計画の見直しを行い、より良い調査の実現に努めている。

### IWC中間会合の開催

2月3日から5日までアンティグア・バーブーダにおいて、17カ国が参加して国際捕鯨委員会(IWC)中間会合が開催された。当研究所からはダン・グッドマンが出席した。会合では前回のIWC本会議でのアイルランド提案の取り扱いについて審議されたが、結論は得られなかった。

### 韓国・中国・ロシア3カ国コミッショナーが来日

2月22日から28日まで韓国・中国・ロシアのコミッショナーが来日、会議が開催されたが、23～24日に沿岸小型捕鯨基地である太地町を訪れた。当研究所から大曲研究員が同行した。

### 公益法人の業務及び財務状況の検査の実施

2月27日水産庁遠洋課 棚倉海洋哺乳類管理官外による事業の運営状況等についての検査を受けた。

## 日本鯨類研究所関連出版物等 (1997年12月～1998年2月)

### [印刷物]

当研究所：財団法人日本鯨類研究所年報 平成8年度. 77pp. 日本鯨類研究所, 1997/10.

当研究所：捕鯨をとりまくこの1年 1997年(後期). 195pp. 日本鯨類研究所, 1998/1.

長崎福三：食生活の中の魚. 国際海洋シンポジウム「海は人類を救えるか」('97年度版)：73-

82, 1998/1/22.

長崎福三：資源管理システムの見直しを。明日に挑む：132-137, 1998/2/1.

西脇茂利：特集2：勇魚会シンポジウム「ザ・クジラ」-1 洋上における鯨種判定について。勇魚，  
27：55-56, 1997/12/25.

大隅清治：日本鯨類研究所の創立10周年を迎えて。鯨研通信, 396：1-5, 1997/12.

大隅清治：創世紀から発展期へ。水産世界, 46(12)：18-20, 1997/12.

大隅清治：新たな捕鯨の創造を目指して。大洋漁業南氷洋捕鯨船団の記録を残す会編：捕鯨に生きた：197-205, 1997/12/5.

大隅清治：標本採集船の代船建造が必要。明日に挑む：344-350, 1998/2/1.

大隅清治：新捕鯨構想を早期に提案。水産週報, 1448：17, 1998/2/5-15.

島 一雄：海洋生物全体の取り組み。水産世界, 46(12)：23, 1997/12.

島 一雄：年の初めにあたって。日本水産資源保護協会・月報, 401：2-3, 1998/1.

島 一雄：地道な調査活動こそ捕鯨再開の道。明日に挑む：222-228, 1998/2/1.

Tamura, T., Fujise, Y. and Shimazaki, K.:Diet of Minke Whales *Baraenoptera acutorostrata* in the  
Northwestern Part of the North Pacific in Summer, 1994 and 1995. Fisheries Science,  
64(1):71-76, 1998/2.

田中昌一：摂餌開始期のカタクチイワシ仔魚の生残能力に対する卵サイズの影響。日本水産学会誌,  
64(1)：8-15, 1998/1.

渡邊 泉・山本義志・本田克久・藤瀬良弘・加藤秀弘・田辺信介・立川 涼：1980-82年および1984-  
86年に捕獲した南半球産ミンククジラの水銀蓄積の比較。日本水産学会誌, 64(1)：105-  
109, 1998/1.

#### [放送・講演]

西脇茂利：クジラについて。東京都中央区立豊海小学校, 1997/12/18.

大隅清治：ふるさと群馬。群馬テレビ, 1997/12/15.

大隅清治：Cetaceans in the South-east Asia. クラチエ・カンボジア, 1997/12/20.

#### [新聞記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・給食にクジラ「伝統」復活!? 山口・下関 捕鯨基地の食文化を今に：朝日新聞 1997/12/16.
- ・元・水産庁次長 島一雄氏 鹿児島大で特別講義 海洋基本法の必要性説く：みなと新聞1997/12/26.
- ・世界捕鯨者カウンスル 3月2-4日に設立総会 カナダBC州で：日刊水産経済新聞 1998/1/9.
- ・水産業の指針'98 “新しい捕鯨創造”へ提案 (財)日本鯨類研究所 大隅清治理事長：みなと新聞 1998/1/16.
- ・年頭会見 新しい捕鯨の創造へ 大隅日鯨研理事長 再開の機運高まる：日刊水産経済新聞1998/1/16.
- ・年始会見 大勢は捕鯨再開へ 鯨研・大隅理事長：水産タイムス 1998/1/19.
- ・大隅日本鯨研理事長が年頭会見 「新しい捕鯨の創造」提案を 海洋生態系の研究機関をめざす：日刊水産通信 1998/1/19.
- ・業界首脳 新春語録 商業捕鯨に代わる形態創造 大隅鯨研理事長：新水産新聞 1998/1/21.
- ・ここが聞きたい “人類共有の財産”が前提 (財)日本鯨類研究所理事長 大隅清治氏：水産タイムス 1998/1/26.
- ・下関の小中学校鯨肉給食 2月中旬から順次実施：山口新聞 1998/1/27.
- ・下関市 鯨肉給食を延期 抗議電話、質問状 対応検討：毎日新聞 1998/1/27.
- ・来月中旬から鯨肉給食実施 下関教委：朝日新聞 1998/1/27.
- ・鯨肉給食を実施 下関市教委：読売新聞 1998/1/27.

- ・七つの海の不思議な物語43胃袋から人間を発見？ 食道が広いマッコウ 内外で伝説がのこる：朝日小学生 1998/1/27.
- ・公海捕鯨禁止妥協案議論 IWC 3日から非公式会合：みなと新聞 1998/1/30.
- ・アイルランド提案でIWC中間会合開催：日刊水産通信 1998/2/2.
- ・IWC中間会合終るわが国の立場に理解 アイルランド提案問題：日刊水産通信 1998/2/10.
- ・本会議で継続審議へ アイルランド案 IWCの中間会合：みなと新聞 1998/2/10.
- ・調査捕鯨の段階的廃止など主要議題に IWC総会：読売新聞 1998/2/10.
- ・議論継続で合意 アイルランド提案 IWC中間会合開く：日刊水産経済新聞 1998/2/12.
- ・鯨の動き宇宙からキャッチ 宇宙開発事業団 小型衛星、来秋打ち上げ：日本経済新聞 1998/2/13.
- ・初のクジラ観測衛星打ち上げ 来秋以降 地球観測衛星と相乗り：日刊水産経済新聞 1998/2/16.
- ・アイルランド提案は議論継続に IWC中間会合：水産タイムス 1998/2/16.
- ・「硬いけど、おいしい」 下関市10年ぶりクジラ給食：山口新聞 1998/2/17.
- ・捕鯨の歴史と文化継承に 下関の10中学「クジラ給食」：毎日新聞 1998/2/17.
- ・鯨肉給食おむね好評 下関の10中学「かわいそう」の声も：読売新聞 1998/2/17.
- ・下関で鯨肉給食スタート「牛肉みたいおいしい」市教委 自然保護の必要性指導：朝日新聞 1998/2/17.
- ・「鯨給食」お目見え 商業捕鯨禁止以来10年ぶり 下関：みなと新聞 1998/2/18.

[雑誌記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・特集(祝)(財)日本鯨類研究所 共同船舶(株) 創立十周年：水産世界 1997/12.
- ・南氷洋鯨類捕獲調査船団 南氷洋・出港：水産世界 1997/12.
- ・捕鯨再開へ向け一致団結 鯨研創立10周年記念式：水産週報1997/12/15・25.
- ・南氷洋ミンク鯨捕獲調査 自民党捕鯨議連が報告会開く：水産界1997/12.
- ・日本鯨研・共同船舶創立10周年の集い 貴重な資料蓄積で成果上げる：水産界1997/12.
- ・鯨研、ミンク肉300トンを販売：水産界1997/12.
- ・「座礁・混獲した鯨類への対処法」マニュアル発刊 セーブ・ザ・マリンマンマール事業検討委員会：水産世界 1998/1.
- ・南氷洋鯨類捕獲調査船団が出港：水産界 1998/2.
- ・新捕鯨構想づくりへ～大隅鯨研理事長：水産界 1998/2.
- ・新たな捕鯨の創造を 日本鯨類研究所大隅清治理事長：水産世界 1998/2.

## 京きな魚 (編集後記)

第11回の南氷洋捕獲調査は、お蔭様で無事調査を終了して、4月の上旬には約半年振りで日本の港に帰ってくる予定です。

今回の巻頭論文は、多くのヒゲクジラ類が子育てをする低緯度海域での、南氷洋捕獲調査の往復航海時の目視調査で得られた、鯨類の分布状況等の調査結果を取りまとめたものです。

鯨体各部位の名称は、古くからこと細かに区分されており、その多様さは肉食文化圏の人々

の牛や羊の名称区分の比ではなく、日本人が如何に無駄なく鯨体の全てを利用してきたか、また、鯨食文化が如何に奥深いものであるかを知ることが出来ます。

第50回IWCは、4～5月にオマーンで開催され、IWCの正常化や次期調査計画等が審議されることになっており、現在、当研究所の理事長以下全員がその準備に追われています。

(守矢 哲)

ストランドディングレコード(1997年11月～1998年3月受付)

No.	種名	評定	産地	地名	位置	年月日	状況	生死	身長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
EX-039	クマゴク	B 1 1	沖縄	宮古郡伊良部島佐良良	651025 龍潭(定置網)	920509	龍潭(定置網)	生存→飼育	2.00		佐伯信雄		新聞情報(琉球新報971112)	生身骨格(琉球大)	
S-001	クマゴク	A 1 1	沖縄	国頭郡金武町沖		920509	龍潭(定置網)	生存→飼育	2		若林修夫	鳥羽水族館	新聞情報(琉球新報971112)		文献(203)。国営沖縄記念公園水族館で飼育。若林修夫、土田武信(LOVE)が撮影。新開記事(赤松970816)
S-002	クマゴク	B 1 1	沖縄	名護市嘉陽		790118	龍潭(沖し網)	生存→飼育	1.59 体重95kg。33日経過後死亡		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)	文獻(218)(104)。DS-005を番号変更。	
S-003	クマゴク	B 1 1	沖縄	国頭郡宜野座村渡部		820327	漂着	死亡	2.51 体重267kg。		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)	文獻(104)。DS-001を番号変更。	
S-004	クマゴク	B 1 1	沖縄	具志川市(金武沖)		840424	漂着	死亡	2.62		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)	文獻(104)。DS-002を番号変更。	
S-005	クマゴク	B 1 1	沖縄	島尻郡佐敷町富祖崎		880104	漂着	死亡	2.505 体重290kg。		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)	文獻(104)。DS-003を番号変更。	
S-006	クマゴク	A 1 1	沖縄	国頭郡宜野座村古知屋		880114	漂着	死亡	1.866 体重146kg。		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)	文獻(203)(104)。DS-004を番号変更。	
S-007	クマゴク	A 1 1	沖縄	名護市嘉陽		900516	龍潭(沖し網)	生存→死亡	1.17 体重39kg。生後1-2ヵ月と推定。		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)	文獻(8)。RS-001を番号変更。	
S-008	クマゴク	B 1 1	沖縄	国頭郡金武町沖		920509	龍潭(定置網)	死亡	2.66 体重374kg。		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)	遺棄者、土田武信(LOVE)が撮影。新開記事(赤松970816)	
S-009	クマゴク	B 1 1	沖縄	国頭郡金武町沖		931204	龍潭(定置網)	死亡	1.96		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)		
O-480	クマゴク	B 1 1	新開	利根郡山町大崎		940225	漂着	死亡	7.8 体表に靑々の斑点多数。詳細計測は国営沖縄記念公園水族館。		青柳彰	寺泊水族館	新聞情報(琉球新報971112)		遺棄者、土田武信(LOVE)が撮影。新開記事(赤松970816)
S-010	クマゴク	A 1 1	沖縄	名護市安部		951228	龍潭(定置網)	死亡	2.96 体重560kg。計測は国営沖縄記念公園水族館。		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)		遺棄者、土田武信(LOVE)が撮影。新開記事(赤松970816)
S-011	クマゴク	B 1 1	沖縄	国頭郡今帰仁村古宇利		960115	龍潭(定置網)	生存→放逐	3		佐伯信雄	沖縄サコヒョウ	新聞情報(琉球新報971112)		
S-012	クマゴク	B 1 1	沖縄	国頭郡宜野座村渡部沖14m		970122	龍潭(定置網)	生存→放逐	2.57		土田武信	LOVE(サコヒョウ)	新聞情報(琉球新報971201)		情報源は新聞情報(赤松970816)に基づき。国営沖縄記念公園水族館が確認。放逐。新開記事(琉球新報971203)
EX-037	マカカ	A 1 1	北海道	室蘭市沖(釧路沖)		970805	目視情報	生存	ヒョウタン?が首に絡まり、首を絞め、呼吸困難に陥る。		深川潤彦	高麗学園大学獣医学部	新聞情報(琉球新報971007)		室蘭沖の鯨類生体観測中に撮影された。
O-481	マカカ	B 1 1	新潟	三島郡寺泊町		971007	港内迷入	生存	体長約2.5m。		青柳彰	寺泊水族館	新聞情報(琉球新報971007)		
O-474	マカカ	A 1 1	熊本	宇土市御興茶(クマゴク)海岸		971015	漂着	生存→放逐	2.9 体表は新聞情報で後継切断。吻端一切断筋まで4.5m。鮮度良好。		山田香	国立科学博物館	新聞情報(熊本日報971016)		千歳時に後継に取られ死亡。熱帯職員らからクマゴクで測た約を中。測測時に放逐した。
M-122	シクアラ	B 1 1	北海道	網走市北3東1海岸		971016	漂着	死亡	13.06 詳細計測有り。		三好浩治	三好浩治			
O-472	マカカ	A 1 1	神奈川	後援市佐島大瀬越沖(須藤沖)		971018	龍潭→漂着	死亡	13.06 詳細計測有り。		三上成次/石井久一	京急油壱マリンパーク			10/18撮影に導き取った死体が横浜須賀野市の定置網に99%。その後、10/26須賀野市京急海岸に漂着。八景漁船(アハタス)(10/20)、油壱マリン(10/28)、日新(10/27)が調査。他報告者：海洋調査(三重大)、山田香(国立科学博物館)、佐藤千恵(八景漁船)、徳武(アハタス)、山田和彦(伊豆及シカゴ)資料館。新聞記事(毎日971018、神奈川971027)。
O-473	クマゴク	B 1 1	北海道	利根郡利根町新家(利根島)		971021	漂着	死亡	体長約8m。腹腹。		佐藤修彦	利根町立博物館	国立科学博物館博士館		尾分堀河立碑

No.	種名	評定	産地	取名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
O-476	ツツクシ	A	1	千葉	船山市市長海岸	971025	漂着	死亡	10	足部深爪状跡で計測、やや腐敗	山口雅彦	船山市自然環境部 農水産課	無し	無し	10:00AM発見、漂着場所付近に埋却。他報告者：福田一廣 精蘭に寄生虫、埋却。
O-477	オナリ	B	1	愛知	緑豆産地町東横豆、袋ヶ島沖(三河湾)	971027	混獲(伊達網)	死亡	1.2	体長20cm、衰弱、計測直前。鮮度良好。	木部兵也/田島木橋子	第一発見者：指原明和(秋田県立大) 藤野(秋田県立大) 藤野(秋田県立大)	内蔵腸胃(部分)、胃内容物(一部分)、肝臓(部分) (凍凍)	無し	10:00AM発見、漂着場所付近に埋却。他報告者：福田一廣 精蘭に寄生虫、埋却。
M-123	シツクシ	B	1	和歌山	東本郷郡高野町浦町字久井	971103	混獲(定置網)	死亡	4.7	体長0.9。	輪爪健	那智郡高野町水産漁業課	第一発見者：指原明和(秋田県立大) 藤野(秋田県立大) 藤野(秋田県立大)	内蔵腸胃(部分)、胃内容物(一部分)、肝臓(部分) (凍凍)	定置網の網持ち作業中、網のフープに絡まり死亡していた。地元消費。
O-478	オコソドリ	B	1	長崎	福江市(五島列島)	971112	漂着	生存→死亡	4.7	体長3m、体重約300kg。	桂田苗	第一発見者：藤原芳美(みやぎ県立大) 藤原芳美(みやぎ県立大) 藤原芳美(みやぎ県立大)	筋皮、脱脂(日録)	定置網の網持ち作業中、網のフープに絡まり死亡していた。地元消費。	
M-124	カサツキ	A	1	青森	青森市後泊(202)沖(津軽海峡)(青森湾)	971113	混獲(イソ定置網)	死亡	体長約12m、下顎から右後部を縫製、胴体計測値あり。	体長約12m、下顎から右後部を縫製、胴体計測値あり。	金保	青森県青森市水産課	筋皮、脱脂(日録)	定置網の網持ち作業中、網のフープに絡まり死亡していた。地元消費。	
O-479	オナリ	B	1	愛知	豊橋市杉山町砂川干潟(三河湾)	971116	漂着	死亡	1.285	体長28.4cm、詳細計測有り。鮮度良好。	木部兵也/長谷川明/武藤裕子	南知多ビーチランド/豊橋市自然史博物館/豊橋動物園	第一発見者：藤原芳美(みやぎ県立大) 藤原芳美(みやぎ県立大) 藤原芳美(みやぎ県立大)	筋皮、脱脂(日録)	自然史博物館で11/21解剖、埋却。他報告者：坂本武治(日本動物学研究所)。
M-126	シツクシ	B	1	和歌山	西牟婁郡由本町野郷	971126	漂着	死亡	4.7	体長1.0。詳細計測有り。	岩谷知重	由本町建設課	無し	無し	地元消費。
O-483	ツバハシカ	C	1	千葉	船山市平砂浦海岸	971202	漂着	死亡	2.1	腐敗。	山口雅彦	船山市自然環境部	無し	無し	漂着場所付近に埋却。
O-484	ツツクシ	A	1	千葉	船山市平砂浦海岸	971202	漂着	死亡	9.8	死後2か月以上経過、頭部は骨白骨化。	山口雅彦	船山市自然環境部	無し	無し	漂着場所付近に埋却。
M-125	シツクシ	B	1	北海道	根室市根室港(根室湾)(根室海峡)	971207	漂着	死亡	4.9	死後2か月以上経過、頭部は骨白骨化。	近藤聖久	根室市郷土資料保存センター	筋(日録)	筋(日録)	西の風強く北西から吹きわたると思われる。埋却。他報告者：後川隆彦(盛岡学院大)。
O-482	種不明ハナシ	D	1	沖縄	八重山郡西表島由砂川河口	971218	漂着	死亡	4.24	腐敗進み大部分白骨化。	中神伊名志	西表島エコシステム協会/環境庁沖縄野生物学研究所	頭骨(報告書)	頭骨(報告書)	首筋と尾筋は腐敗して無し。筋は残存せず。ツツクシ?
M-127	シツクシ	A	1	和歌山	東牟婁郡太地町	971221	混獲(定置網)	死亡	4	詳細計測有り。体長約0.5L。	安藤元	水産庁臨時職員	筋(日録)	筋(日録)	箱網で溺死、地元消費。
M-128	シツクシ	A	1	和歌山	東牟婁郡太地町	971223	混獲(定置網)	死亡	4.72	詳細計測有り。体長約0.8L。	安藤元	水産庁臨時職員	筋(日録)	筋(日録)	箱網で溺死、地元消費。
EX-035	ツツクシ	B	1	三重	鳥羽市鳥羽沖北西約7km(伊勢湾)	971225	目視情報：漁内侵入	生存	国長約1m(新体長?)	体長約1m(新体長?)	吉岡基	三重大学生物資源学部	無し	無し	12月15日頃から出現。25日に南知多ビーチ動物員が確認。朝日新聞(三重版)に掲載記事(読売新聞(三重版)980113)。
O-485	ツツクシ	A	1	神奈川	磯須賀市長井長井港湾内(相模湾)	980103	漂着	死亡	2.08	腐敗進み一部白骨化。	徳武浩司/大津大	磯須賀市長井長井港湾内(相模湾)	無し	無し	16:00発見。観測は4月4日。
O-486	ツツクシ	A	1	東京	新島村間々下海岸(伊豆諸島)	980107	漂着	死亡	5.65	詳細計測有り。体長?。	橋山重義子	第一発見者：青河徳郎	筋(日録)	筋(日録)	6:30AM発見。17:30解凍調査後後岸埋却予定
EX-036	ツツクシ	A	1	沖縄	糸島市野野古(高津沖)1km	980113	目視情報	生存	体長約3m。	体長約3m。	松田正道	新島村(読売新聞980114)	無し	無し	NTV(4/27)本報掲載。埋却は海上自衛隊が決定。他報告者：吉岡基(三重版)、新聞記事(読売新聞(三重版)980113)。
O-487	ツツクシ	B	1	愛知	豊田郡赤松町大字赤松(豊田湾)	980121	漂着	死亡	1.826	詳細計測有り。腹部に穴、卵嚢胞複数。	大池隆也/羽島昌彦	第一発見者：太田久雄	無し	無し	箱網で溺死(清潔)。子宮(卵嚢胞)あり。寄生虫(国立科博)、各種臓器(FOR・鳥取大)

No.	種名	性別	種名	位置	年月日	状況	生死	体長	生体情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
M-129	シクアアウ	B	1	島根	徳山郡多伎町大字小田	980123	混濁(定置網)	死亡	6.2		石原正登	多伎町定置網漁業	頭皮、斬(白鯨粉)	機関
EX-038	シ・エ・ン	A	1	沖縄	名護市辺野古キャンプ場 977 沖辺野古徳港 (3km)	980126	目視情報	生存	体長約2-3m	坂東武治	日本鯨類研究所	新聞情報(イタナ ネット情報新聞/沖 縄タイム980126)	無し	EX-036と同一個体? 9:00-10:00AM, 夏 涼放送、琉球新報が空撮, LOVE/エノン/ NGOおのづかが海中で確認。現物は海上 基地建設予定地。
EX-040	シ・エ・ン	A	1	沖縄	名護市辺野古崎南 1.3km	980228	目視情報	生存		坂東武治	日本鯨類研究所	新聞情報(イタナ ネット情報タイム 980301)		8:15AM, 沖縄タイムズ記者が空撮。現物は 海上基地建設予定地。

\* 表中の「評」は鯨種判定の信頼性を区分しており、Aは日鯨研職員が調査や写真等によって鯨種を確認した場合、Bは他の研究者の方が鯨種の判定を行った場合、Cは鯨種の判定はされていても別定者が不明で判定に疑問がある場合や、判定が推定による場合が多い場合を示しています。また「種」は「種」各欄は、調査総数のうち確信が判明した鯨のみを記入してあります。[体長]はmで記載してあります。  
記録番号の“O”はオクシラを、“EX”はストラディンダの分類(鯨研通信387号)にはあてはまらないもの、希少種の発見や珍しい事例について寄せられた情報を紹介しています。  
\*(財)日本鯨類研究所では、日本沿岸に漂着、迷入、混獲した鯨類の情報(オクシラ/イタナ/イタナ)の収集、記録を行っております。ストラディンダを発見したり、新聞記事などの情報がございましたら、ぜひ日本鯨類研究所までご連絡ください。